

「宗教はコロナウイルス後の社会をどう目指すか」

2022年3月10日

WCRP平和大学講座

岩村義雄

主題聖句: ローマ13章1節 「人は皆、上に立つ権力に従うべきです。神によらない権力はなく、今ある権力はすべて神によって立てられたものだからです。」『聖書協会共同訳』

<序>

今年の干支は寅である。「寅」は動物のトラ(「虎」tiger)ではない¹。Ana Filipa PalmeirimとLuke Gibsonは²、データベース、既発表論文、報告書を使って、トラが生息する国々(インド、インドネシアなど)とジャガーが生息する国々(ブラジル、ボリビアなど)における既存の水力発電ダムと計画中の水力発電ダムを分析した。トラは絶滅寸前と、科学誌に掲載した。中国・南方科学大学などの研究者の論考である。ダム建設による被害を論及している³。トラとジャガーの生息地を横切っている既存のダム585か所と計画中のダム470か所が特定された。さらに、現在の水力発電ダムの貯水池を作るために、トラの生息地1万3750平方キロメートルとジャガーの生息地2万5397平方キロメートルが浸水していたことが明らかになった。人間の技術が自然界の脅威になっている証明であろう。

2018年9月6日、わたしは中東のシリアに孤児の家を建設するためにおもむき、その帰途、レバノンのベイルートで、北海道の厚真地震のニュースを知った。帰国した日曜日、ただちに新千歳空港へ向かった。損壊した「萱野茂二風谷アイヌ資料館」を訪問。萱野志朗館長ご夫妻から二風谷ダム建設に関する説明を聞いた。裁判で、「土地収用裁決は違法」となったにもかかわらず、1997年にダムは税金700億円以上をかけて完成した⁴。二風谷ダムは、アイヌの主要な食物であるサクラマスの漁を切断した。なぜなら沙流川を遡上し、産卵する水生生物の生態系を人間の経済発展のために犠牲にしたからである。ダムが建設されれば、サケ、マス、アユなどの生命だけではない。トラなど陸生生物、鳥、昆虫なども絶滅するだろう。ダムは川の仕組みと自然界の循環「すべての川は海に注ぐが海は満ちることがない。どの川も行くべき所へ向かい、絶えることなく流れゆく」、という生態系の営みを暴力的に破壊している(コヘレト1:7)。

激甚の厚真地区は、さながら中東の空爆跡のようだった。北海道胆振東部地震厚真川地区[厚真町・安平町・むかわ町]の被害は厚真ダムが原因だと認めないのはどうしてだろうか⁵。国家、地方自治において権威(エクスーシア)ある人々に委ねておけばなんとかなるのだろうか。抑圧されている民の平安、いのち、しあわせの祈祷、題目を唱えるだけの宗教ならば存在意義はないだろうに。災害、犯罪、人間の手によって噴出している生態の破壊、廃棄できない原子炉、金銭の飽くなきぶんやり合戦で地球は覆われている。気

¹『日本語の大疑問』(国立国語研究所編 幻冬舎新書 2021年158-160頁)。中国の史書『漢書』(かんじよ)は、中国の王朝前漢[ぜんかん 紀元前206-西暦8]の記録。漢書で、「寅」=「蟄(みみず)(中国語 yǐn いん 「動く」の意)」。

²2021年12月19日発行の科学誌『コミュニケーションズ・バイオロジー』Communications Biology Impacts of hydropower on the habitat of jaguars and tigers Dec.19, 2021。

³研究結果は、トラの生息地にあるダムの影響で、トラの推定生息数の5頭に1頭に相当する729頭がいなくなっている。絶滅寸前である。調査によると、41箇所もの新ダム建設がトラの生息域を奪っている。拙稿季刊誌『支縁』No.38(2022年2月6頁)。

⁴拙論「技術至上主義は自然災害をもたらす—第1次北海道地震ボランティア」(2018年9月9-12日)。「私はこのダムが出来れば、沙流川 [アイヌ語サラ《霞(はる)原》に由来]にサケをよみがえらせたいとの永遠の夢、永遠の願いは完全に閉ざされると思っています。二風谷(ひふね)はサケは一匹も上がってこなくなるでしょう。……日本の政府は、なんべんアイヌから土地を取り上げればいいのか?」と父萱野茂(1926-2006)氏は訴えていた。

⁵拙論「第2次北海道地震ボランティア」(2018年11月4日-10日)。「厚真町の長さ1キロ×500メートルの深層崩壊は吉野地区、桜丘地区だけではありません。県道235号線は厚真川沿いにあり、遡ると厚真ダムがあります。そこは現在厳重な立ち入り禁止です。……9月6日にダムの放流、決壊の有無、増水について確認しようがありません。手前に厚幌(あっぽろ)ダムが建設中です。治水ダムの目的は日本最大の工業地帯苫小牧東地区への工業用水供給が最大の理由です。」『キリスト新聞』(2018年10月1日付) <http://www.kiishin.com/2018/1001/18948/>。

候変動、某国の細菌兵器開発、テロはだれが責任をとるのか。袋小路、壁、抜け出られないトンネルで右往左往している世界、社会、制度についていこうと、行政の下部組織の活動に一喜一憂していくよいのか。礼拝堂、寺社仏閣、宗教施設などの安泰、聖職者の生活保障さえできれば満足している惰眠にふける化石宗教でいいのか。政府からの助成金欲しさのために、自己喪失、主体性の欠如、周囲のめまぐるしい変化に取り残されないためのなりふりかまわない宗教教育機関。ならば、世の権威者が希求する「無宗教」の時代に符合するだろうに。優等生とみなされている宗教の門をだれがくぐって、救いを求めるか。

コロナウイルス後の社会に、貧者が生きやすい潮流を起こすのは、宗教か無宗教かを考察したい。

今日は、重心の低い知のわたしも明解な解答はないが、宗教の境界線を越えて、靈性をもって人類の「悪」にどのように対話していくべきなのか、ご一緒に黙想、熟考、実践したい。共に糸口について 合掌。

目次

第1章 歴史についての反省と検討	
1. 世の支配者 官僚機構	3
2. 権威者ニムロドの登場	4
3. ヒエラルキーの源流 言語統一、包摂、技術至上主義	5
4. 「自然法爾」	6
5. ロシア・ウクライナ戦争	9
6. エクスーシアの監視を放棄したメディア、日本の市民社会が劣化している	10
7. 日本のメディアの虚偽	10
8. パンデミック防止に失敗	11
9. マスコミといツールはコモン(共有財)であれ	15
10. 立身出世主義観が「自助・共助・公助」精神を醸成	15
12. 立身出世主義	17
13. 「自助・共助・公助」	19
14. 共生	22
第2章 普遍的価値 道徳的課題	
1. 道徳は国家以上の価値	1
2. 約束の地	3
3. シオニズム	6
2. 謝罪と責任	7
3. 我が不徳—無知で愚かな議論の失敗談	9
4. 時間に制約されない旅	10
5. 懺悔	11
6. 妙好人	12
7. レビヤタンの陰謀に歯向かう	14
8. ホルミシス	14
9. 内なる人の繰り返す良心のまひ	17
10. 御用学者に挑んだ良識のある樫の木	19
11. 價値両義性(アンビヴァレンス)	19
12. 非宗教家の悪—創造的復興、内部被ばく、ダム、原発の再稼働、コロナ禍のウソ	20
第3章 多元宗教から「無」宗教へ	
1. 知恵に頼らず、靈性による	2
2. ロゴス論	3
3. 神学者にもなれば途中で脱落	7
4. 基層宗教	10
5. 多元宗教への脱皮 一致より対話へ	12
6. 多元的宗教から「無」宗教へ	13
7. エクスーシアの「パンプティコン」からの解放	15
8. 共苦	15
9. 絶対性	17
10. テロ国家とも外交で和解	18
11. 「無」宗教とは — 基層宗教性 と「無」宗教へ	21
12. 神なしに生きる	21
13. 目からうろこ	23
14. 科学者の「無」	23
15. 仏教の「無」	25
16. キリストの「無」	26
17. 貢い	26
18. 「靈性」は単なる静的概念ではなく、はたらきである	28
索引	
人名索引	

1. 世の支配者 官僚機構

主題聖句のローマの信徒への手紙 13 章 1 節を読むと、宗教者であっても「上位の」⁶権威には服従する書かれている。ヨーロッパで宗教帝国による圧政に民は辟易としていた。自浄作用がなかった。権力⁷と結びついたキリスト教会と、世俗の皇帝政治による二者間の統治論争が続いた。ローマ教皇ボニファティウス 8 世 [在位 1294-1303] は 1302 年、聖俗両権に関する大勅書を発布した⁸。「主よ、剣なら、ここに二振りあります」(レカ 22:38)を曲解。西方教会は二権論「この世は聖俗二つの権力によって統治されている」と解釈した。世俗権力が教会政治に口をはさめなくした。歴史上、絶え間なく教会と国家が対立してきた際、せめぎ合いがあった。喉に刺さった骨のように相互に譲歩しない聖書の言葉であった。

Πάσαι ψυχὴ ἔξουσίαις ὑπερεχούσαις ὑποτασσέσθω. οὐ γὰρ ἔστιν ἔξουσία εἰ μὴ ἡπόθεον, αἱ δὲ σύνοικοι ὑπόθεον πενηντίαι εἰσίν (ローマ 13 章 1 節 ギリシャ語)・

パサプスケイエクスーシアイスヒウペレクーサイスヒウウポタッセッソウウガルエスティンエクスーシアエイメイヒウウポセウーアイデウーサイヒウウポセウーテタグメナイエイシン
pasa psyche exousiais hyperechousais hypotassesetho ou gar estin exousia ei me hypo theou hai de ousai hypo theou tetagmenai eisin

「権威」(ギリシャ語 **ἔξουσία** エクスーシア *exousia*, ヘブライ語 **מְלֹאת** シャリート *shaliyt* <エクスーシアある者の意>)のある者に服従するように人類は従わざるを得なかった歴史がある。「太陽の下に不幸があるのを見た。それは権力ある者が引き起こす過ちで」(コヘレト 10:5)。

宗教改革者の雄であるマルテン・ルター[1483-1546]は、次のように説き勧めた。

「要綱は火の如くである。剣の職務はそれ自体として正しく、聖パウロがローマ書第十三章[二節]に言う如く、有益な神の定めであり、神は人々がそれを侮蔑せずして、畏怖し、尊敬し、遵奉せんことを求め給い、之に悖る者は罰せられずに済まない。けだし神は人間の間に二種類の統治を設け給うた。その一つは剣なしの言葉による靈的な統治であり、之によって人々は敬虔な義しい者となり、またその義によって彼等は永遠の生命を獲得する。そして神はこの義を彼が説教者たちに委託し給うたかの言葉によって作り出し給うのである。いま一つは剣による現世的な統治であって、これはかの、言葉によって敬虔な義しい者となって永遠の生命を得ることを欲しない者どもを、なおこの現世的統治によって強圧し、世間の前に敬虔な義しい者とするためのものである。そして神はこの義によって作り出し給う。神はこの義に永遠の生命を以て報いようとは欲し給わないけれども、なお人々の間に平和を維持するために之を求め、之に現世の財貨を以て報い給う。⁹」

ルターは、「敬虔な義しい者となって永遠の生命を得ることを欲しない者どもを、なおこの現世的統治によって強圧し、世間の前に敬虔な義しい者とするためのものである。敬虔でない者たちを権力によって、「強圧」することによって、平和を維持するために、俗のエクスーシアを軽んじないようにと戒めている。

内村鑑三[1861-1930]の弟子であった塙本虎二¹⁰はローマ 13 章 1 節をラディカルな敷衍訳¹¹にした。

⁶「上に立つ」**ὑπερέχω** (<**ὑπέρ**, 越えて, **ἐχω**, 状態にある) には次の意味がある。①優越する、主権を持っている; ②**ὑπερέχων**, この上ない尊さ, フィリ 3:8. ②よりすぐれる、まさる。『新約聖書ギリシャ語小辞典』(織田昭 大阪聖書学院 1976 年)。

⁷エクスーシアを「権力」と訳すのは、「権力はいたずらに剣を帯びているわけではありません」とあるように、警察・軍隊をもっている場合(ローマ 13:4)。

⁸ボニファティウス 8 世最初に聖年を定めてローマ巡礼を行わせた教皇。

⁹『現世の主権について』(マルテン・ルター 吉村善夫訳 岩波文庫 1977 年 97 頁)。

¹⁰塙本虎二[1885-1973]大正-昭和時代の聖書学者。東京帝大在学中から内村鑑三に師事。弟子に「原始福音・キリストの幕屋」創立者手島有郎。

¹¹『塙本虎二訳新約聖書』(塙本虎二 塙本虎二訳新約聖書刊行会 新教出版社 2011 年。聖書知識社 1966 年)。内村鑑三は不敬事件によって、井上哲次郎[1856-1944]との論争の結果、免職。天皇に対する宗教的礼拝は拒絶した。しかし、天皇個人に対しては、戦後以降の人間とは異なる信愛の情を抱いていた。だから塙本のローマ 13 章の敷衍訳も納得できる。『内村鑑三全集 39 卷』(岩波書店 286 頁)。

「人は皆上に立つ(国家の)官憲に服従せねばならない。神からではない官憲はなく、現存の官憲は(ことごとく)神から任命されたものであるから。2節 従つて官憲に反抗する者は、神の命令に違反する者である。違反する者は、自分で自分に(神の)裁きを招くであろう。(この世で罰を受けるばかりでなく、最後の日にも。)3節 役人が恐ろしいのは、善いことをする者でなく、悪いことをする者である。(だから)あなたは官憲を恐れなければ、善いことをせよ。そうすれば官憲から誉められる。」『塚本訳』

では、もし国家や学校が言うことと、教会が言うことが異なる場合、どう判断するのか。全体主義、ファシズム、ジェノサイド[集団殺害]をするエクスーシアに対しても、絶対服従すべきなのだろうか。「解放の神学¹²」の聖書翻訳者本田哲郎¹³訳も確認してみたい。

「人はみな、すぐれた権威には従うべきです。じつに、神の下にあるのでなければ、それは権威ではありません。神の下にあってこそ、権威として命令を出せるものだからです。そういうことですから、

2節 権威に逆らう者は、神が命じることに背いたことになり、背く者は自分の身に裁きを招くことになるのです。

3節 あなたたちが人に親身に関わっているかぎり、指導者たちは恐ろしい存在ではありません。ただ、あなたたちが人に不当な仕打ちをしているのなら、別です。あなたたちは権威を恐れずに暮らしたいと願っています。それなら、人に親身に関わりなさい。そうすれば権威からの評価をいただけます。

また、『今ある権威』と訳されている *hai ousai*(存在するものは)は、つづく *hypo theon* と合わせて“神の下に存在するもの”と理解すべきです。*ousai* はいわゆる “Be 動詞” 活用形で、第一の文章の *hypo theou* の前にもあり(ただし省略されている)、第二の方だけ両者を切り離して訳す必然性はないからです。

この後、パウロはくどいほどエクスーシアを担う者の根本的な条件(特性)すなわち『権威者は神に仕える者です』を繰り返します(4・5・6節)。こうして、従うべき“上に立つエクスーシア”を私たちが正しく見極めるべきことを示唆しているのです。¹⁴」

本田は、「上位のエクスーシア」を、「すぐれたエクスーシア」と解釈している。それによると、国家、上司、夫などに必ずしも盲従しなくてもよいことになる。エクスーシアが“ὑπὸ θεοῦ”「神の下にある」と直訳である。他の聖書箇所で「夫、親、上司、王」などに「従う」についても、文脈から判断すべきであろう。聖書全体から解釈するのが熟達した宗教者である。教条主義的な逐語靈感説¹⁵に立つと、聖書字句拘泥主義者に陥りやすい¹⁶。自分たちの教団、教派によって暗誦させられた一箇所の聖句を用いて、見誤る傾向があろう。

2. 権威者ニムロドの登場

創世記から検討したい。「彼は主の前において勇ましい狩人であった。それゆえこうしたことわざがある。「主の前における勇ましい狩人ニムロドのようだ」(創世記 10:9)。

ニムロドは人間の強力な狩人であった。自分の知的および肉体的優位性を発揮した。より劣る人々を自分の思いのままにする最初の人になった。搾取する体制を造りあげた。専制的な支配下で人々を拘束した。「主の前において *τόπος της οὐρανού* *Yahwehリフネー ヤハヴェ*¹⁷」とは、「場」(トポス)ではない。ニムロドの野心は神の怒り

¹² 抨論『解放の神学とは何か』(2021年 神戸国際キリスト教会 「牧師の抨論」8)。

¹³ 本田哲郎[1942-]ローマ教皇庁立聖書研究所卒、元フランス公会管区長、聖書翻訳者『新共同訳』、『フランス公会訳』、『本田訳』、神戸国際支縁機構理事。『本田哲郎訳』(新生社 2001年)の表題は『小さくされた人々のための福音』池長潤[1937- 元カトリック大阪大司教区大司教から表紙は聖書らしくないようと言われ、改題。

¹⁴ 『続 小さくされた者の側に立つ神』(本田哲郎 2000年 136-149頁)。

¹⁵ 素朴な根本主義か、あるいは現われる文脈は偶然的であるのに一貫した(coherent)福音を主張する教義学的な誤用に門を開くことになる。……テクストを断片的に扱う解釈学に基づいた、稚拙なレベルに拘泥する聖書学を生み出す。『聖書を取り戻す—教会における聖書の権威と解釈の危機』(C.E.ブライテン・R.W.ジョンソン 芳賀力訳 教文館 1998年 57頁)。“聖書については神の靈によって書かれたことを両者が同意するものの、聖書の記述の解釈については同じではない……それは律法の字義的解釈には、律法制定の意図が含まれていないと考えるからである”『オリゲネス4ケルソス駁論II』(キリスト教父著作集9 井村みや子訳 教文館 1997年 243頁)。

¹⁶ 自由主義神学のフリードリヒ・シュライエルマッハ[1768-1834]は『宗教論』で、「字句に拘泥する神学者たち」(Buchstabentheologen ブーフシュターベン)と譴責している。Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern 1799 S201.

¹⁷ 『セプトゥアギンダ(七十人訳)』(ギリシャ語翻訳)旧約(以下 LXX)では、ἐναντίον κυρίου τοῦ θεοῦ エナンティオン キュリウートー セウー「主なる神の前に」である。ヘブライ語リフネイ ヤハヴェの「リフネイ」は、英語の before <に向かって、の目に、の御前にの意>、ギリシャ語は ἐναντίον エナンティオン enantion。

を引き起こすまで増長した。狩猟した獲物を神に捧げるため祭壇を築き、敬虔さを装って民の心を掴もうという戦略であった¹⁸。権威者のパターンとして、いつの時代も権力者はニムロドのように「主の前に」敬虔さを装って人心をたぶらかしてきた。冷静に油断なく権力者の型を洞察すべきだろう。リトマス試験紙に相当する判断基準は、弱者に対する「大悲」¹⁹が顧みられるかどうかである。聖書は「悪魔の策略」について言及する。パウロは「空中のエクスーシアをもつ支配者」(エフェソス 2:2)が、狡猾な「策略」を用いることを警告する。エフェソス 6 章 12 節で、「権利、権力、主権」を牛耳るのは悪魔と述べられている²⁰。イエス・キリストが高い山で誘惑された時、サタンは、「この国々の一切のエクスーシアと栄華とを与える。それは私に任されていて、これと思う人に与えることができるからだ」と豪語している(ルカ 4:6)。つまりサタンは「この世の神」としてあらゆるエクスーシアを掌握していることに他ならないだろうか(IIコリント 4:4)。

3. ヒエラルキーの源流 言語統一、包摂、技術至上主義

歴史上の最初の権力を誇示したニムロドは何を試みたか。ニムロドは、ヒエラルキー²¹の源流を形成した。彼は、多様性ではなく、統一性を実現するために、言語を「一つ」にした。二番目に、「包摂」²²subsumptionを目指した。三番目に、技術至上主義を手がけた。

まず、創世記 11 章 1 節、6 節に、「一つの」(ヘブライ語 **אֶחָד** エハド *echad* ギリシャ語 **μία** ミア *mia*)が出ている。神は言葉が通じない混乱²³「**בָּלָל** バラル *balal*」をもたらされた。それまで、ニムロドは全世界を権力の下に共通言語を用いて統一しようとしていた²⁴。

二番目に、隣人のことにはまけず、自己愛に屈折していく。マルクス[1818-1883]が述べる「包摂」²⁵の原初を発見する。社会から個々の表現の自由がなくなってしまう。隣人とのコミュニケーションが少しずつになっていた。ニムロドの本当の動機は、名声を求め、「包摂」によって一致団結を維持することが目的であった。創造者は最初に、「地に満ちて」(**מְלֹא** マレー *male*)と言った(創世記 1:28)。にもかかわらず、ニムロドたちは、統合し、ヒエラルキーの象徴として、バベルの塔を建設した。「彼らはさらに言った。『さあ、我々は町と塔を築こう。塔の頂は天に届くようにして、名を上げよう。そして全地の面に散らされることのないようにしよう。』」の「名を上げよう」から人間様の名声を鳴り響かせる野心があることがわかる。「散らされる(**פָּוָתֵס** プウツ *pawts* <分散するの意>)ことのないように」、と制度の解体を恐れていた(創世記 11:4)²⁶。

三番目に、ニムロドは高い塔を自然の石、岩ではなく、技術によって建造した。「さあ、れんがを作り、よく焼こう」(創世記 11:3)。粘土を「焼く」ために炉が製造された。鉄、銅、金属を加工するために、高温で鉱石の不純物を取り除く技術を開発した。「青銅や鉄のあらゆる道具を作る者となった」(創世記 4:22)。「アスファルトが漆喰の代わりとなった」という技術革新によって、全地に散らされない強大な帝国を築こうとした(同 11:3)。技術至上主義の構造はニムロドの遺伝子を継承している。

¹⁸ “BEREISHIS” Vol.1 Mesorah Publications, Ltd. New York, 1969 p.318.

¹⁹ 悲は、あわれみ、同情心。他人の苦を除く。多くの人々の苦しみを救おうとする仏や菩薩の慈悲心。『広説佛教語大辞典中巻』(中村元 東京書籍株式会社 2001 年 1657 頁)。(以下『中村大辞典中巻』1657 頁)

²⁰ 『キリスト者の戦い』(D.M.ロイドジョンズ 村瀬俊夫・後藤公子訳 いのちのことば社 1986 年 66-70 頁)。

²¹ *ἱεράρχια* (ヒエラルキア 英語 *priest's office* 聖書の *ἱεράτεια* <祭司職の意>*hierateia* が語源)。英語 *hierarchy* ドイツ語 *Hierarchie* (ヒエラルヒー) 基本的には社会における「ピラミッド型の階級組織構造」。

²² 「包摂」とは、経済・社会が、その本来の諸関係にとって外生的な存在を取り込む過程をいう。

²³ 『共通善の追究の試み—「バベルの塔」を手がかりとして—』(新免貢[1963]-宮城学院女子大学研究論文集 2020 年 12-13 頁)。多様性ではなく、「一様性」(ヘブライ語 **אֶחָד** エハド *echad* レエーフセファトイユーシュ)にある通り、権力基盤を強固なものにする手段として、アラム語聖書を引用して説明。

参考までに、LXX では、次のようにある。**μία πόσιν** ミア・ポシン「すべてを一つに」という機運を盛り上げた視点を論及。**μη ἀκούσασιν οἴκωσις** **ποτὲ φωνὴν τῶν πληρίων** メーアクウソースイン エカストステーン フォネントゥーブレースイオン *may not understand each the voice of his neighbour*

²⁴ マルクスは、労働を 2 つの形態、「形態的包摂」と「実質的包摂」に分類している。「資本主義的私有の最後を告げる鐘がなる」にある資本蓄積の歴史的傾向で、資本の包摂が形態的包摂から、実質的包摂へと進み、さらに資本による資本の「包摂」(Subsumtion)が進み、「資本独占」の形成を予言していた。『マルクス・コメントアル V』(内田弘 現代の理論社 1973 年 102-104 頁)。

²⁵ “The Pentateuch Genesis, Exodus 1-11” Commentary on the Old Testament C.F.Keil and F.Delitzsch James Martin, 1989 p.172-173.

ニムロドのクローン的権力者は、政治・経済・文明を発達させた。進歩をもたらし、人間に夢を与えた。神の介入をもはや必要としない。救いは神からもたらされる奇跡ではないように思わせた。救済事業は人類の責任分担だと教育、科学、思想を確立した。衛星、遺伝子操作、デジタルを媒介として、人間は地球外にまで領域を延長した。いまや人間は宇宙への主権も担っている。

しかし、冷静に振り返って、歴史上の痕跡は必ずしもバラ色ではなかった。技術の発達は、便利さと引き換えに、巨大管理機構による環境汚染、生態破壊、安全でない食品がテーブルを支配してきた。貧困、虚偽、戦争にだれも責任を取らない。歴史の負の連續性から手を切るには何が必要だろうか、「ポストコロナ」を考慮するには、最初に、歴史を検証し、真実を見つめるべきだ。学者は過去を分析できても、未来像は描けなかった。ジレンマ、もどかしさ、ラビリンス(迷路)から脱出する価値観をだれが構築するのか。被ばく、コロナ禍、ウクライナ戦争難民に、宗教者はアウトサイダーでよいものか。

「高貴この上もない戦争といふものは、居候や女街や盗人や強盗や無作法者や阿呆や借金で首がまばらぬ人間、結局、世のなかの殘滓みたいな連中がやらかすものでして、決して、燈火を掲げて夜も眠らない哲人たちにできることではありません」、とオランダのユマニスト^㉖デジデリウス・エラスムス 1466-1536^㉗は言った。

4. 「自然法爾」

親鸞[1173-1262]^㉘は、現実の絶対否定、さらに否定の否定を契機とした。そのことによって、「同朋同行」^㉙=共同連帶の思想を萌芽させようとした。キリストは隣人愛を説いた。

宗教は、国家、民族、国境を越え、地球全領域にまたがる性向がある。仏教の発祥のインド、中国においても「国家観」は確立していなかった^㉚。国際宗教の仏教が日本に定着してから、布教しながら国家、権力者、エクスーシアと制度、国造りと共存してきた。タイにおいて、政府の国家観と仏教の国家観は同一ではない。白河法皇が嘆いた「加茂河の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの」^㉛のような僧侶が武器を装備するのは決して普遍的ではない。

2021年2月13日午後11時7分頃、福島・宮城で震度6強による10県で計157人の負傷者、なかでも福島県が83人、住宅は約1,400棟の損壊があった。11時間後に、一番被害が大きかった福島県相馬市尾浜の大橋に到着。県外ボランティアお断りの影響のため、私たち以外にボランティアはいなかった。

2021年2月16日は日寺の屋根の瓦が飛び、神社の鳥居は倒壊していた。日蓮[1222-1282]生誕800年目であった。帰神後、神戸新聞会館で、「今こそ、現代の親鸞、日蓮が求められる」と語る契機となった。千葉災害ボランティアの地元では、日蓮は根強い人気がある。地元で敬慕されている日蓮上人は元寇の侵入に対して決然と立ち向かう勇気があった。日蓮は愛国の士であった。人生において4回も島流しの法難を受苦した。鎌倉時代は、異常気象、疫病、飢餓で民衆は辛酸をなめていた。ちょうどコロナ禍の現代と似通った時代と言えるかもしれない。「はるかに時代を超えて男女の平等を見据えた日蓮の高い理想とヒューマニズムを見るべきである」^㉕。その系統になる日本最大の宗教グループ創価学会は政権与党にある。自民党の重石として軍事安保に対する抑制力になるように期待されている。第二次世界大戦前、国民に最も八紘

^㉖ ユマニスト(仏語 *humaniste*) ルネサンス期[14-16世紀]に、古代ギリシャ・ローマの古典を通して、人間研究を行った人文(jinbun)主義者ペトラルカ、ボッカチオなど。

^㉗ 『痴愚神禮賛』(エラスムス 渡邊一夫譯 岩波書店 1955年67頁)。

^㉘ わたしは個人的に、日本における最大の信仰者を親鸞とするなら、最大の天才是空海。最大の秀才は道元と、証言したりもしてきた。

^㉙ 親鸞は、ともに念佛を唱える同信の人々を同朋同行と呼んだ。『岩波仏教辞典』(中村元・福永光司・田村芳朗・今野達 岩波書店 1989年612頁)。“同朋同行二人” Kobo Daishi is always with me (written on the hats of Shikoku pilgrims) 天の「空海といっしょに二人で修行」と用いられる。

^㉚ 『東洋人の思惟方法 第二部 日本人・チベット人の思惟方法』(中村元みすず書房 1955年91頁)。

^㉛ 『平家物語』卷第一 白河天皇[1053-1129]。

^㉕ 『増補 日蓮入門 現世を撃つ思想』(末木文美士 ちくま学芸文庫 2010年)。

一字³³、大東亜共栄圏³⁴、五族³⁵共和を啓蒙したものとしては北一輝³⁶、大川周明³⁷をあげられよう。歴史から教訓を嗅ぎ取れない権威者、民意、メディアは物事の本質を見誤った悲劇がある。本来、神仏習合である本地垂迹説³⁸により、伝統宗教としての両者は良好な関係にあった。神と仏が包括されたシンクレティズム³⁹(重層信仰)は、日本の中世時代に定着していた。しかし、明治維新により神仏習合に待ったがけであった。エクスーシアは廃仏毀釈という災難を仏教にもたらした。当時も、浄土系は一番宗教人口が多く、三井甲之[1883-1953]⁴⁰は門徒たちをはじめ、日本全体に影響を与えた。「自然法爾」⁴¹という御仏の教えと国体思想を合体させ、国民に啓蒙した⁴²。世界平和のために一億総玉砕も辞さずの熱狂を煽った。わたしは、中国南京市、盧溝橋⁴³、万人坑⁴⁴などを訪問した。戦時下に關東軍であった父祐治⁴⁵[1919-1988]たちの犯罪の一端を調べた。



南京大虐殺シンポジウム[1937年12月]
中国南京市紫金庁 2017年9月10日。



中国「藩家峪惨案記念館」(万人坑) 2018年10月9日。

³³ はつこういちゅうく[八方の意]>世界全体。第二次世界大戦の日本が外地への侵略を正当化するためのスローガン。『新明解国語辞典』(第七版)。神武天皇即位前紀の権原遷都の令(のりごとの一節「六全(ぐんにのうち)を兼ねて都を開き、八紘(やのめのした)を掩(おおひて)て宇(いへ)にせむこと、亦(また)可(よからずや)に基づいた近代の造語。八紘は四方四隅、すなわち天下、全世界のこと。宇は屋根で、一つの家とすること。すなわち天下、全世界を一つ屋根の下に入れる意。『神道大辞典』(佐伯有義、宮地直一、臨川書店1986年)。

³⁴ 吉田松陰のアジア侵略構想から派生したとわたしは考える。「今急いで軍備をなし、そして軍艦や大砲がまだ備われば、北海道を開墾し、諸藩主に土地を与えて統治させ、隙に乘じてカムチャッカ、オホーツクを奪い、琉球にもよく言い聞かせて日本の諸藩主と同じように幕府に参観させるべきである。また朝鮮を攻め、古い昔のように従わせ、北は満州から南は台湾・ルソンの諸島まで一手に收め、次第次第に進取の勢いを示すべきである。」『吉田松陰著作選』(幽囚録 奈良本辰也 講談社学術文庫 2015年159頁)。松陰の加害の論理が大東亜共栄圏思想の源流と言えよう。コロニアリズムに反省は

³⁵ 五族(漢・満州・モンゴル・朝鮮・日本)が仲良く、最初にそう提唱したのは、民間の在満日本人がつくった満州青年連盟の人たち。圧倒的多数派の漢民族に排日感情が弱まる中で、建国当時は人口の1%に満たなかった日本人が生きていくには「協和」を訴えるしかない。一方の「王道樂土」は、武力で制覇する「霸道」に対し、徳で治める「王道」でみんなが楽しく暮らせる国を築こう、という意味。

³⁶ 北一輝[1883-1937] 戦前の思想家、国家社会主義、日蓮主義。右翼のバイブルになった『日本改造法案大綱』をもって、天皇大權による戒厳令、国家機構改造、アジア大帝国の建設を論じた。

³⁷ 大川周明[しゅうめい 1886-1957] 日本ファンズム運動の理論的指導者。拓殖大学教授。『日本二千六百年史』は日本精神を鼓舞する代表作。

³⁸ 仏や菩薩が本来の姿(本地)ではなく、神と仏の形(垂迹身)となって人々を救済するという神仏同体説。明治維新により神仏習合が破棄された。廃仏毀釈という切断に到った。その結果、仏教というエクスーシアに屈服せざるを得なくなった。

³⁹ シンクレティズム syncretism 「重曹信仰」相異なる信仰や一見相矛盾する信仰を結合・混合すること。

⁴⁰ 三井甲之 東京大学卒。『親鸞研究』、『自然法爾』、『祖国礼拝』など多数。箕田胸喜は三井甲之の弟子。箕田胸喜[1894-1946]慶大、國士館専門学校教授。反共・右翼思想家。原理日本社主宰、国際反共連盟評議員。三井の著書『親鸞研究』には、「祖国・日本禮拝」は新世界宗教であるなど、八紘一宇、大東亜共栄圏を昂揚する「自然法爾」のメカニズムの原点であった。

⁴¹ 英語ならさしつけず Everything is OK.とも言える。「即ち『祖国・日本禮拝』は此の新世界宗教である。それは一切の仮定、概念、本體の迷信から脱却して、理智と功利との祈禱ではなく、現實祖国日本の運命に隨順しようとする歸命没入感に活きしめるところの内的信頼世界である』『親鸞研究』(三井甲之 東京堂1943年321頁)。

⁴² 『親鸞研究』(同322,340頁)「わがわれは祖国・日本に仕へ、祖国日本を禮拝しようとするのである」、「國禮は思想……『うちてしやまむ』※と、……『皇祖の御精神を憶念し奉るのである。これがわがわれらの『祖国禮拝』の行法である』※国民の戦意を高揚させるスローガン「撃ちてしやまむ」は、「石椎いもち、撃ちてしやまむ」『古事記(中)』(神武天皇四久米歌 講談社学術文庫 1985年37-39頁)“石椎の大刀でもって、撃ってしまうぞ”から引用。

⁴³ 「盧溝橋事件」[1937年(昭和12)7月7日]は日中戦争[1937(昭和12)-1945]の原因となる。牟田口廉也第15軍司令官は、「盧溝橋で第一発を撃って戦争を起したのはわしだ」とインパール作戦で語った。『検証戦争責任II』(読売新聞戦争責任検証委員会 中央公論社 2006年126-127頁)。

⁴⁴ 「藩家峪惨案記念館」(万人坑)を訪問。1941年1月25日、日本軍3千人が、男315人、女352人、子ども563人、計1230人を虐殺、家放火、羊300匹、ラバ96頭、豚253匹を略奪。万人坑とは、①一度の大量虐殺(平頂山事件)、12年で3万6千人殺害(承徳[ショウドク]市郊外の水泉溝)、②採掘作業の強制労働で死んだ中国人を捨てた坑、③ダム、日本軍要塞を造るため。『華北の万人坑と中国人の強制連行』(青木茂花伝社 2017年57-62頁)。

⁴⁵ 抨論『南京大虐殺は史実か』(2017年9月15日) <http://kicc.sub.jp/wp-content/uploads/2019/02/fdb41c054312c5623a47353e0149da17.pdf>

いつまでも過去にこだわらず、過ぎ去ったことは水に流して未来志向で考えようよ、と何度も聞いてきたかわからない。しかし、戦前、戦時下世代から突然に私たちは生まれたのではない。無関係に別世界から飛来したのでもない。先祖から受け継いだ伝統、文化、価値観が自己形成される時に、曾祖父、父から継承されていることは否定できない。「戦前・戦中世代の遺した責任も当然に相続しなければならない」⁴⁶、と歴史学者家永三郎[1913-2002]は言う。キリスト教会も例外ではなかった。天皇国体に抗ったキリスト者もいた⁴⁷。だが、1941年、総体として政府によって統合された日本国内のプロテスタント34教派が合同して誕生した日本基督教団はエクスーシアに従順であった⁴⁸。1942年12月8日、日本基督教団の教団統理者富田満[1883-1961]⁴⁹は、「本教団所属全教師ハ戦時下宗教ノ上ニ垂レサセ給大御所ヲ拝察シ奉リ、愈々宗教報國ノ決意ヲ新ニシ宏大無邊ナル聖恩ニ応ヘ奉ランコトヲ誓ヒ、且ツ益々一致協力皇國ノ為大東亜共栄圏建設ヲ目指シテ匪躬ノ節ヲ尽サレンコトヲ望ム」、と。天皇国体、大東亜共栄圏建設、宮城遙拝を植民地の韓国などでも主張した。

戦後、宗教がもたらした不幸の反省が出てきた。浄土真宗総長であった豊原大成[1930-2022]⁵⁰は、わたしに「阪神宗教者の会」⁵¹の定期的な会合場所を提供した。豊原は、「戦時教学」について慚愧に堪えないと語った⁵²。国家のエクスーシアも、過去の歴史からの教訓に従って、二度と民を戦争に巻き込まないように治める務めがあろう⁵³。

今、コロナ感染者は、トリアージが必要となり、エクモ(ECMO「人工肺とポンプを用いた体外循環回路による治療」血液を体外に出す特殊な治療、体外循環)が騒がれている。病床が不足しているため、自宅療養などで、感染症や血栓症、腎不全など様々な合併症が起りやすいと不安が広がっている。自宅療養だと死ぬ可能性は高く、夜も不安で眠られない、と人々は言う。コロナのせいで息をひきとる。では、此岸(現世)で念佛三昧、難行苦行の禊ぎ、善行に励んだから、彼岸(あの世)では極楽浄土とだれが確信をもって言えようか。御仏に手を合わせてきた信仰者は、本源へ遡れば死後に釈尊⁵⁴に会う希望がある。涅槃⁵⁵は煩惱が消え失せた状態だから、神経質に思い煩うことはないことになる。過度な心配は無用である、人間は、いつかは死ぬのだから、と真宗東本願寺の玉龍寺の五百井正浩住職は言う。キリスト者の場合、己が「徳」故に、罪⁵⁶が帳消しになって、天国という憩いの汀で生きる保証はあるのだろうか。聖書にある「保証」*απόβασις* アップバーン語源はセム語⁵⁷を信じているだろうか。

⁴⁶『戦争責任』(家永三郎 岩波書店 2002年339頁)。家長は、「戦争を知らない世代」にも責任があると述べる。

⁴⁷拙稿『神戸と聖書』(神戸新聞総合出版センター 2001年 209-212頁)。

⁴⁸1941年6月25日に、日本基督教団は成立。11月24日、文部大臣の認可を権太から沖縄、台湾、朝鮮、中国華北、華南を網羅。

⁴⁹富田満は、エキュメニカル運動指導者。日本キリスト教会大会議長、日本基督教団統理者として天皇賜謁。神社参拝の非宗教性を主張。軍用機「日本基督教団号」4機献納。山本五十六元帥追悼大会主催。※山本五十六[いそろく 1884-1943]元帥海軍大将。兄の高野丈三と共に日本基督教団長岡教会に通っていた。

⁵⁰兵庫県在住の宗教者らが東日本大震災直後から集まった。当初は神戸市垂水区で、高野山真言宗西方院、柿本人麻呂神社、神戸国際キリスト教会の持ち回りだったが、2016年頃から西宮市西福寺で、月一回定例の講座。

http://kiccsub.jp/ecumenity/E5%AE%97%E6%95%99%E9%96%93%E3%81%AE%E5%AF%BE%E8%A9%B1/hanshin_religion

⁵¹国体にに戦前、戦時下真宗が積極的に参与した反省を豊原大成は、「戦時教学」を通じて戦後語り続けた。「苦労しても殺し合いはすべきでない。苦労というのは外交努力ですね。そもそも中国や朝鮮半島がよかつたら日本の文化はありません。漢字も仏教もそこからきた、大事な『先輩』なのです』(『赤旗』2015年6月9日付)。

⁵²『歴史哲学講義』(上)(ヘーゲル 長谷川宏訳 1994年 18-19頁)。

⁵³日本・中国におけるサンスクリット語「釈迦牟尼仏」からの尊称、釈迦族の尊者の意であるが、おそらくは(釈迦牟尼世尊)の語を略したものであろう。「昔釈尊の御法とかせ給へりける鷲の御山」(撰集抄 4)、『岩波仏教辞典』(同 382頁)。

⁵⁴涅槃=ニルヴァーナ。安らぎ。永遠の平安。一切の迷いから脱した境地。絶対の静寂。心の安らぎ。(迷いから離れた)理想の境地。迷いの消えた状態。静けさ。すがすがしさ。さとり。究極のさとり。さとりの領域。さとりの境地。さとりの世界。『中村大辞典下巻』(1317頁)。

⁵⁵拙論『キリスト教と復興』(関西学院大学チャペル 2021年 15頁)。罪とはアダムから継承している原罪ではない。ヘブライ語、ギリシャ語でも靈的とは限らない。『キッテル新約聖書神学辞典 罪』(G.クヴェル 教文館 1974年 7,11-15,51頁)。無関心、無知、愚かさである。罪とは、「無知無関心」(マタイ 25:41-43)、「自己正当化」(マタイ 25:45)、「偽り」(ヨハネ 8:44)である。「最も小さな者」(マタイ 25:45)に対する無関心、無知は、永遠の懲らしめ、すなわちゲヘナに行く。世の窮状に対して愛の不在、人と人、神と人、人と被造物の「関係」の破棄が罪人の断面図である。『解放の神学』(G.グティエレス 関望、山田経三訳 岩波現代選書 1985年 186頁)。

⁵⁶『新約聖書釈義事典』I(教文館1993年195頁)。売買をするにあたって、売り買いを完了することを誓う、一部前払い金のこと。完全支払いを保証する前払い金の解説がある(IIコリスト1:22、エフェソス1:13,14)。書かれた書面によってではなく、聖書が契約を保証すること。

5. ロシア・ウクライナ戦争

「苦悩が臨む。平和を求めて、どこにもない」(エゼキエル 7:25)。

第二次世界大戦から 77 年、核保有国のロシアは牙を剥いた。同じ正教会のウクライナに対してである。その首都キエフは両国正教会の出発点である⁵⁷。石巻ハリストス正教会の田畠隆平司祭は、「プーチンはキエフをずっと欲しかったんだ」と 2 月 26 日、わたしにプライベートに語った。水野宏司祭も、「宗教者として戦争は反対」の見解は、現地でも同様である、と言明した。日本の隣国の中華と台湾もウクライナ戦禍の近似の確執が起こる可能性を否定できない。すると日本のエクスーシアは、参戦余儀なくされるシナリオが現実味を帯びてくる。繰り返し同じ轍を踏まないとだれが言えようか。

ロシア・ウクライナにおいて、正教会同士の深刻な対立ではなく、宗教的には同根である。しかし、2014 年以降、国家のエクスーシアが対立してきた。国家は宗教を凌駕していることは明白であろう。宗教は国家の暴走を制御できる力、知恵、実績もまったくない。「私が平和を語っても 彼らはただ戦いを好む」(詩編 120:7)。宗教は無辜な市民を守ることができていない。「彼らは、わが民の傷を安易に癒やして『平和、平和』と言うが、平和などはない」(エレミヤ 6:14)。エクスーシアは、戦禍での最大の犠牲者、孤児・夫をなくした独身女性・高齢の独居者なども顧みていない。エクスーシアが自我を主張するなら、対話は成立しない。外交という場には、自他の領域を超えた「無我」が求められよう。そのために、宗教者こそが内包する靈性が思いがけない突破口を開く。対立、物別れ、決裂になる場合、呼吸を整えたりする知恵について、政・官・財・学、メディアのエクスーシアは想起しないだろう。生理学的だけでなく、精神と肉体の分裂を整えることによって「いのち」が新たになろう。「氣」は禅では「禪機」⁵⁸と言われる。道家によれば、第一原理たる道から発する「活き」に転嫁する。したがって、「無」は人間理性の領域を遥かに超えるものである。知性、知恵、理性の営為によって構築することはできない。感受作用(受)、認識作用(想)、判断作用(行)を調和させる呼吸法などは、靈操の世界である。

ユダヤ人の哲学者ハンナ・アーレント[1906-1975]は、全体主義が人類歴史の中で登場してきた必然性を語る⁵⁹。さらに彼女はどうしたら戦争を阻止できるかを言わず、教訓にするために、『全体主義の起源』の 3 卷を書いた。そこでは官僚制度が一度転がり出すと歯止めがきかないという論及もある。哲学者の森田美芽[1958-]は、ソ連は労働者の国家とはいえない、ただの官僚支配の国家にしか過ぎなかつたと日本聖書協会主催の聖書セミナーで言及した⁶⁰。

コロナ禍にあっても、日本では、政治の迷走が続き、官僚の縦割り行政が医療崩壊をもたらし、弱者にケアが行き届かない現実を突きつけた。「大路は荒れ果て、道行く人は途絶える。……他の人のことを顧みない」(イザヤ 33:8)。

⁵⁷ ロシアの総人口約 1 億 4 千万人中、63 パーセントがロシア正教徒、一方、ウクライナには 3500 万人の正教徒(モスクワ総主教座系と、コンスタンティノープル総主教座系の二つの信徒がいる)。『宗教の自由報告書』アメリカ国務省 2021 年版。世界規模の家族のような正教会の中で 4 割がロシア国の信徒たちである。988 年、ウクライナ国首都キエフで最初の信者ルーシが洗礼を受けてから千年以上を経ている。分家のように、コンスタンティノープル系のウクライナ正教会もある。圧倒的にウクライナ多いのは、ロシア国の首都モスクワにある全ウクライナの府主教オヌブリイの教会、司祭、信者である。モスクワと対立するコンスタンティノープル系の教会はある。2022 年 2 月 24 日、ウクライナで民間人が殺害された。同日、ロシア側のモスクワ総主教座系のウクライナ正教会最高位がプーチン大統領の悪のメッセージが発信された。

『神戸新聞』(2022 年 2 月 27 日)『クリスチャントレス』(2022 年 2 月 28 日付) https://christianpress.jphobel-prizenv.0228?fbclid=IwAR2nG_cBA7iTReXHElavxCeYFIxk6S_CKlb3Aeng6XjeOv9NwlRCOweth

『クリスチャントゥデイ』(2022 年 2 月 28 日付け) <https://www.christiantoday.co.jp/articles/30628/20220228/donation-for-orphans-widows-elderlys-in-ukraine.htm>

「カヨ子基金」ホームページ <http://kioskobesub.jp/?p=19646&preview=true>

⁵⁸ 禅僧が他に対して示す独特の鋭い言行。『中村大辞典』中巻(1026 頁)。

⁵⁹ 「戦前の専制政治からわれわれが知る旧式の官僚支配と全体主義支配との間の際立った相違の一つは、前者が政治領域内に属する臣民の外的運命を支配するだけで満足し、精神生活まで掌中に収めようとはしなかつたことである。全体主義官僚制は絶対的権力の本質を一層よく理解し、市民のあらゆる問題を私的のものであれ公的のものであれ、精神的のものであれ外的のものであれ、同じ一貫性と残虐さをもって統制する術を心得ていた。その結果、古い官僚支配のもとでは諸民族の政治的自発性と創造性が抹殺され止まったのに対し、全体主義支配は人間の活動すべての領域における自発性と創造性を窒息させてしまった。政治的非創造性のあとに続いたのは全面的な不毛性だったのである」『全体主義の起源 2』ハンナ・アーレント大島通義・大島かおり訳 みすず書房 2013 年 202 頁)。

⁶⁰ 大阪キリスト教短期大学学長を務めた森田美芽は、2013 年 8 月 8-22 日、第 64 回日本聖書協会聖書セミナー(セミナー委員長岩村)で語った。

鳥で溢れた鳥籠のように彼らの家々は欺きで満ちている。こうして、彼らは強大になり裕福になった。彼らは太って、色つやもよくその悪事には限りがない。孤児のための裁きを成し遂げず貧しい人々の訴えも取り上げない(エレミヤ 5:27-28)。権力者はいつの時代も、「欺きで満ちている」、「裕福」、「悪事には限りがない」。とりわけ、孤児、貧者が叫ぶ生活保障、人権、平等は司法においても却下されてきた。「善を行うことを学べ。公正を追い求め、虐げられた者を救い孤児のために裁き、寡婦を弁護せよ」(イザヤ 1:17,23, 10:2)。

6. エクスーシアの監視を放棄したメディア、日本の市民社会が劣化している

2017年6月、イタリア中部アマトリー・チエ地区被災地へ神戸から単身訪問⁶¹。298名が災害死だった。その8年前の2009年4月6日3時32分、最大の地震マグニチュード6.3が古都ラクイラを襲った。死者309名(伊ANSA通信)。家の損壊数千人。ラクイラも訪問した。2009年の爪痕は癒えていなかった。

2009年3月31日、民を安心させる作戦のためテレビなどで「安全宣言」がなされた。その結果、7人の地震予知委員会、学者たちは有罪、実刑が宣告された。一方、否定の論理をもたない日本では、フクシマ原発の安全神話を繰り返した学者、メディアに一切、おとがめなし。日本の学者、マスコミ、政治家は、「地震予知は極めて困難」「当時は大地震発生の可能性はとても少なかった」などと言い訳を繰り返した。8年前、ラクイラ地震の6日前に当地で、イタリア政府の「大災害の予測と防止のための国家委員会」が開かれた。戦前の日本大本営の発表と同じように、「安全宣言」が茶の間のテレビ番組でも報道された。こうした安心情報について、地震予知専門家、学者たちを用いた。民は「官」の発表を疑わなかった。地震直前には、地元テレビ局ニュースは「安全宣言が出されました」「市民の皆さまには朗報です」と放送。翌朝の地元メディア紙は、小さな群発地震で不安におののく住民に、「小さな地震によるガス抜きが行われたから、もう大丈夫」と虚偽の情報をダメ押しした。フクシマのメルトダウンについても、「官」や科学者が「ただちに危険はありません」と民衆に真実を語らなかったことと酷似している。イタリアも日本も虚偽の安全情報発信の構図は同じであった。記者だけでなく、編集局全体でクリティック[批判]する基本的な姿勢が欠如していた⁶²。イタリアで安心情報が出された6日後の4月6日、住民の安心、信頼、生活は完膚なきまでひっくり返された。大地震がラクイラを襲った。神戸国際支縁機構は、2017年、日本からの救援金をアマトリー・チエに届けるためにわたしをイタリアに遣わした。夜を過ごしたサントスも2009年の地震ですっかり廃村になっていた。ラクイラだけで309名が死亡。ほとんどの死者は建造物の下敷きによるものだった。イタリア中部には、千年以上の石造りの歴史的建造物が多い。住民は、発生の1週間前の3月30日までに、嘘の安全宣言によって避難先から自宅に戻っていた不運があった。そして惨事に遭遇した。遺族は安全といふマスコミ発表をした行政のベルナルディニス副長官、国の予算で研究発表をしている学者たちを告訴した。当然のことながら有罪判決だった⁶³。

7. 日本のメディアの虚偽

イタリアの地震による被害、宮城県石巻市大川小学校は裁判になった。だが、日本の福島第一原発事故は、だれも責任をとらない。福島第一原発の処理水海洋放出問題も有耶無耶になろうとしていまいか。政府は2021年4月、原発敷地内のタンクに貯蔵されている汚染水(燃料デブリなどに触れて放射能汚染された水、約128万トン)を「ALPS」(多核種除去設備)で処理し、海水で希釈した「処理水」として2023年に放出を

⁶¹ 第1次イタリア地震ボランティア(2017年6月5日～10日)<http://kisokobesub.jp/international/9200/>

ウキペディアの「イタリア中部地震(2016年8月)」には、「神戸国際支縁機構、イタリア中部地震の緊急救援募金受け付け開始」。CHRISTIAN TODAY(2016年8月25日)、2016年8月29日閲覧。

⁶²『憲法9条—過去・現在・未来—』(村田充八 県民会館 2021年127頁)。“ジャーナリズムは、政治の社会を見張る「ウォッチ・ドッグ(番犬)」の役割を担う公器”。

⁶³『人はなぜ御用学者になるのか』(島村英紀 花伝者 2013年20頁)。

決定。「関係者の理解なしには、いかなる処分も行わない」と福島県漁連に誓った約束など、完全に反故にしている。

福岡県朝倉市杷木松末の被害(2017年7月5日 死者41名不明1名)岡山県倉敷市真備町箭田の洪水(2018年7月7日 死者51名), 北海道厚真町地震(厚真川地区[厚真町・安平町・むかわ町]2018年9月6日 死者43名), 熊本県球磨川氾濫(2020年7月4日 死者67名 不明2名 約1,020ha, 約6,100戸の泥の被害), 熱海土砂災害(2021年7月3日 死者20名 不明1名)など、災害が起きたときに現地に急行してきた。

何れの災害も現地で避難所の体育館などで住民から直接聞いた情報では、「天災」というより「人災」であった。たとえば、球磨川の水害は市房ダムの放流、球磨川の川底の掘削怠慢、堤防の放置による。人為的な犯罪に近い問題が、脱ダムが原因という理不尽な訴えにすり替えられている。震災直後には、被災者は事実を率直に語っておられたが、翌日、メディア報道などからの情報が入ると、180度違つたようになる。まるで報道官のように、土木業者のずさんさが原因、異常な乱気流が原因などと、論理的に説明されるように変化する。新聞などの報道が与える影響は大きい。同じ人間とは思えないほど、震災について客観的に話される。私たちはあるときには、自衛隊やメディアより早く現場に入って、被災者から直接、話してもらう。その内容が翌日には不確かなものになる。そうしたずれを20年以上味わつてきている。もちろん被災者はウソを言っているのではない。記憶が翌日に打ち消されるほど、マスコミの力は大きい。メディアが虚偽の報道をすれば、そのウソを支持する側にチェンジコートするわけである。ある出来事を目撃したあとに、その出来事に関連した情報が与えられると、その出来事の記憶は、関連した情報の方向に変容してしまうことがある。事後情報によって記憶が変容する現象のことを事後情報効果と言う。事後情報によって変容した記憶は、脳内でそのオリジナルの記憶と混在することがある。それが目撃証言などに影響することが知られている⁶⁴。報道で用いられる地質学者、自然学者、社会学者が論述する災害の因果関係と離れて、自分の身体で知覚(perception)をどう考えるべきか、被災現場で目撃する被災者、ボランティア、住民たちの指向性を追求したい。フランスの学者メルロー=ポンティは、「対象は黒とか青とか、円いとか四角とかしてあらわれる以前に、まず心を惹きつけるものとして、あるいは嫌悪をもよおすものとしてあらわれる」⁶⁵、と「感覚」の現象を言う。さらに、「知覚対象と知覚主体とがその厚みをもち得るのは、感覚のおかげである。感覚は指向的な織り物であって、認識の努力がこれをかえって解体させてしまうのである」⁶⁶、と。災害発生時のリアルな身体的「感覚」が、科学的「認識」によって客観的・因果的・心理学的な構築されたストーリーに組み込まれてしまうのである。ゆえにしたがって、ボランティアは何が真相か、被災地への回数を増すにつれ、識別する力が身についてくる。最初はとつぜんの不条理な体験によって、被災者が精神的に混乱していたせいだと考えてはいけない。本人が遭遇した被害が自分の目、耳、身体全体で遭遇した感覚として語られたからである。傾聴ボランティアを通じた最初の生の声こそ、後世に語り伝える責任があろう。

8. パンデミック防止に失敗

ワクチンは国民の健康を守る武器である。自国生産できるのに、しなかった。毎月訪問している梶原明彦
宮司(文字社 2017年、松末[ますえ]災害で唯一被害にあった宗教施設)は、江戸時代の医学者緒方春朔

⁶⁴ マス・メディアから与えられる情報が人々の記憶に与える影響の問題がある。証言者がテレビやラジオ、新聞、雑誌などマス・メディアを通じて、事後の情報を接することも少なくはない。『事後情報の提示モードと謝情報効果法と心理』(丸山昌一・西真理子・巖島行雄『法と心理』4巻2005年119頁)。

⁶⁵ 『知覚の現象学 1』(M.メルロー=ポンティ竹内芳郎・小木貞孝訳 みすず書房 1982年 62頁)。メルロー=ポンティは、知覚作用とは、判断することではなくて、一切の判断に先立つて感性的なものに内在している意味を把握すること、と。(同76頁)。

⁶⁶ 『知覚の現象学 1』(同 65 頁)。

[1748-1810]に関する近著を2月21日にわたしに寄贈してくださった⁶⁷。恐るべき感染症「天然痘」に立ち向かったエドワード・ジェンナー[1749-1823]は、「ワクチン」を開発した。それより6年前に春朔は、予防接種を日本で成功させていた。全国に広めた。日本はワクチンを作る方法、実験をしてきた伝統がある。たとえば、水痘や日本脳炎のワクチンは世界に先駆けて開発してきた⁶⁸。「官僚など権威者の政策のギャップによりワクチンメーカーは意欲も削がれ目先の経済効果を優先するようになり、……負のスパイラルに陥った」と北里大学大村智記念研究所特任教授の中山哲夫[1950-]は語っている⁶⁹。欧米は2020年12月から各種のワクチン接種が始まった。一方、日本では2021年2月17日に、医療関係者を皮切りに新型コロナウイルスワクチンの接種が始まった。欧米では病原体発見から一年ほどで開発認可されているのに比較して、日本は遅れた。なぜか。それは、小泉純一郎元首相[1942-]は2001年4月から2006年9月まで5年半近く(続投)の「小泉・竹中ラインによる構造改革路線に起因すると考える。経済効率を重んじる新自由主義的な医療改革の反動として、ワクチン開発が遅れたのである⁷⁰。

「パンデミック」⁷¹(「世界大流行」)は、世界的な規模である。

日本政府は「パンデミック防止」に失敗した。PCR抑制論によって、感染が拡大した。中国武漢でコロナウイルスが始まった以降、中国政府は3つに心血を注いだ。①徹底したPCR検査、②大規模なロックダウン、③巨大病院の建設であった。一方、日本の官僚はPCR抑制論一点張りだった⁷²。PCR検査の必要性を訴える学者、専門家はメディアに用いられなかった。SDGs(Sustainable Development Goals)「持続可能な開発目標」すらなかった。厚生省—都道府県衛生部—保健所という制度により、1994年から効率重視による保健所統廃合が始まる。地域保健法第三章第五条、第四条第一項に従って、地域の住民にサービスすべきであるが、コロナ禍にあっては、濃厚接触者の特定や入院調整などに手が回らなくなっていた。

『保険診療』(2022年1月号)は保健所崩壊、病院も自宅療養による医療崩壊について詳述している⁷³。PCR検査抑制だけではなかったことは言うまでもない。新型コロナ患者と通常の病人・怪我人を医療機関がどのように分担して検査、加療するかという大枠のスキームの次元で、政府は誤り続けた。こうした大枠の設定とその具体化を指示することこそ政治家の仕事にほかならない。エクスーシアの怠慢は免れないであろう。

新しいメディア状況によって顕在化されたものも、今次の新型コロナ危機の特徴として指摘されるべきではないか。SNS上の言説を観察してみて最も印象的だったのは、PCR検査をめぐる論争に、多くの医学・医療の「専門家」(自称も含む)が参加していたことだった。公的な議論の場が多様化すること自体は歓迎すべき事柄だが、問題はその中身にあった。多くの「専門家」が、抑制論に加勢し政府の方針を支持したことだ。抑

⁶⁷『伝染病に挑んだ人々』隅部敏明・梶原明彦「予防接種」は秋月藩から始まった』キャンペーン推進協議会2022年32頁。梶原明彦官司は、鳥居ごぶら下がっているしめ縄について説明。「注連縄(しめなわ)」は「雲」、垂れる藁(は)は「雨」、白い紙(「紙垂(し)て)」は「稻妻」と自然生態の循環と説明。聖書と合致している。「誰が洪水のために水路を切り開き 稲妻に道を与える」(ヨブ38:25)。私たち「田・山・湾の復活」の願いにかなっている。

⁶⁸『コロナ戦記』(山岡淳一郎 岩波書店2021年139頁)。

⁶⁹『学術の動向2021年10月』(中山哲夫 日本学術協力財団2021年63頁)。日本学術会議は、4月24日に日本薬学会と共同開催、5月8日には日本医学会連合との共同主催で「コロナ禍と共に生きる[新型コロナウイルス感染症の最前線what is known and unknown]」を開催。2回目に中山哲夫は「COVID-19ワクチン開発はなぜ遅れたのか?——歴史から学ぶこと」を講演。

⁷⁰『コロナ戦記』(同218頁)。

⁷¹ギリシャ語 πάνδημος (pan+δῆμος demos「人々」の意)>+ic<英語名詞形接尾辞>

⁷²拙論「コロナ禍なのにどうしてボランティア」神戸新聞会館聖書のことばシリーズ第91回[2022年] 厚労省の医務技官と密接な利害関係をもつ専門家群(その頂点尾身茂[おみ 1949- 医学者(自治医科大学卒 地域医療・感染症・国際保健), 厚生官僚, 国際公務員]がいる)。

⁷³1994年以後、保健所統廃合が始まった。ボランティアが被災地で炊き出しの許可を得るのは保健所だが、近年、減少している。効率重視のため、保健所は崩壊寸前のところが多い。医療現場も効率重視が求められるため、余裕のない経営に陥っている。『コロナ戦記』(同28頁)。対策の本質における出鱈目さを糊塗しようとするこのツケが回されたのが、各地の保健所である。PCR検査の検査能力を飛躍的に拡大させるためには、大学や各種研究所の動員、民間企業の参入を促進するなどの措置が必要であったが、厚労省は検査の主体を保健所に限定しようとした。保健所は、確定診断、患者の入院先の割振りなどすべての業務を押しつけられて、当然パンクした。なぜこのようなわからなかった不条理をあえてしたのか、その動機は不明ではあるが、これもおおよその見当はつく。厚労省、とりわけその医系技官たちは、感染症対策を自らのテリトリーのなかにとどめ置きたいと考えたのである。しかし、新型コロナの感染力は、長年の行革の対象となってきた保健所の対処能力をはるかに超えていた。『保険診療』(2022年1月医学通信社 白井聰39頁)。

制論に反対する者は排除された。淀川キリスト教病院の白方誠彌[1930]名誉院長は「官僚の縦割りの弊害が醜態をさらけ出した」と2022年2月17日の神戸国際支縁機構理事会で、嘆息混じりに語った。

福島第一原発事故の事後処理においてもだれも責任をとらなかった。今度のコロナによる医療崩壊もだれも責任をとらない。エクスーシアとは単なる名誉欲、金銭欲、ニムロド欲達成の対象だ。その犠牲になるのは古今東西、正直に生きるオクロス(*οχλος ochlos*<民の意>)である⁷⁴。オクロスは後に詳述する「無」にひとしい存在、マイノリティー、エクスーシアに抑圧されている民を意味する。本稿の「ポストコロナ」にあって鍵となる。苦しみと戦う民との連帯に立ち上がるゆえに従来のエキュメニカル⁷⁵運動ではなく、9・11テロ以降、エキュメニティ Ecumenicity⁷⁶を求めるはたらきに仕えるように促された。

今から100年前のスペイン風邪⁷⁷[1917-1920]において、宗教者はどんなはたらき、ケア、教訓を学んだだろうか。当時のキリスト教会は、19世紀末の米国の再臨運動を胸いっぱい吸い込んだ留学帰りがいた。内村鑑三[1861-1930(昭和5)]、中田重治⁷⁸[1870-1939]、木村清松[せいまつ 1874-1958]は、1918年、3人が中心になって熱狂的な再臨運動を始めていた。つまり終末のシオニズム⁷⁹に関心が集中し、スペイン風邪については終末のひとつぐらいにしか考えていないかったと思われる⁸⁰。一方、西暦262年頃、欧州のローマ帝国内のパンデミックで半数近くの人々が犠牲になった時の宗教者は何をしただろうか。ケアのためキリスト者はこうしたなか看病に努め、時に亡くなっていた。そのことはキリスト教禁令が解かれ、国教になるほどの契機になった。

スペイン風邪の猛威は何が原因だったのか。1918年10月31日付けの『土用新聞』には、手がかりがあった。高知での第1、第2期の流行はいずれも陸軍歩兵第44連隊駐屯地(現・高知市朝倉地区)から感染が始まっている。延べ患者数は全県民の約2割にあたる15万2千人で、約1400人が死亡⁸¹。軍隊は、ある意味で不可侵といふか、超法規の領域である。統計、調査、インタビューなども管制が敷かれている。つまり、感染実態についても防衛上、知る由がない。なぜなら軍事基地だからである。『NHK』が基地内の自殺問題を特集したことがあった⁸²。札幌で1つの裁判が行われていた。9年前に自殺で亡くなった自衛官・川島拓巳さん(当時19歳)の遺族が国に損害賠償を求めたものだ。自衛隊員の自殺は毎年60~100人。詳し

⁷⁴ 聖書に出てくるキリストの周囲に集まつた民、「山上の説教」を語られた弟子たち、キリストの「道」に歩む人々(マタイ4:25,5:1 マルコ10:1)。「人々がイエスのところへ、いろいろな病気や痛みに苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人を連れて來たので、これらの人々を癒された」(マタイ4:24)。オクロスは、ギリシャ語 *λαος laos* <民、人々の意>と異なり、キリストの「道」(ギリシャ語 *οδος odos* *ホドス hodos*<(人生の)行路、生き方、生活の仕方>)に属する者である。オクロスは、生産に従事しない者、病気の者、知的身体的に障がいを持つ者、故郷を追われた放浪者たち。つまり「棄てられた者」、物乞ひして歩くしかないアウトカースト、マイノリティーを指す。いわゆる「無」にひとしい存在である。

⁷⁵ 1846年、すべての教派を超えて、キリスト者の一致を目指す福音主義同盟が設立された。以後教会一致促進運動[ecumenical movement]を用いるようになった。『新カトリック大事典I』(新カトリック大事典編纂委員会 研究社 1998年 409頁)。

⁷⁶ ギリシア語 *οικουμένη oikoumene* 「人間が居住する世界」の意から、英語 ecumenical [エキュメニカル「全世界の、全キリスト教会の」の意]といふ語ができる。しかし、9・11テロが発生した2001年以降、キリスト教だけではなく、「啓典の民」(ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教ばかりか、普遍宗教である仏教や、民族宗教神道などの諸宗教とも共生する超教派をエキュメニカル(エキュメニズム)ではなく、「Ecumenicity」エキュメニティ(エキュメニカルの名詞形)と呼ぶようになっている。エキュメニカルであることの資質、状態を示している。超教派 Super-denomination もしくは Super-denominationalism であり、相互に告白し合う世界的に結ばれている状態を意味している。ウイキペディア「エキュメニティ」参照。

⁷⁷ 世界人口の3割近く5億人が感染、5千万~2千万人が死亡(WHO)。世界の3人に一人が感染した推計。患者計23,804,672人 死者388,727人(内務省衛生局)。

⁷⁸ スペイン風邪が始まった1917年から、終焉する1920年まで、真っ最中、中田重治らは、再臨運動を華々しく展開した。いわゆるリババイブル運動である。「ひとりでも多く救われるならば、それだけイエスさまのおいでが近づいて来るわけになる」と。『中田重治全集第1巻』(米田勇 中田重治全集刊行会 1973年 478頁)。

⁷⁹ ユダヤ教のメシアニズムによれば、終末に現われるメシアが、離散のユダヤを世界中から父祖の地パレスチナに集め、ユダヤ人の国家を再興する。この宗教的希望に基づいて、政治的理念と、それにに基づく行動としてのユダヤ民族主義シオニズムが19世紀末に誕生。』『新カトリック大事典II』(新カトリック大事典編纂委員会 研究社 1996年 764頁)。

⁸⁰ 「流行性感冒……西班牙国バルセロナ市の如きは一日の死者千二百人に上りし事あり、誠に恐るべき世界的疫病である」(内村鑑三全集24)(内村鑑三 岩波書店 1982年 538-539頁)。1918年11月10日、「大感謝の内に此の大会(「基督再臨と伝統」)を終わつた。……流行性感冒猖獗を極め会合」(同33巻31頁)。同年11月25日、米国カネギー公会堂に参集したアメリカキリスト者からの再臨についての「拍手喝采に堂も崩れん計り」と日記に記した。(同33巻37頁、同24巻606-607頁)。

⁸¹ 『土曜新聞』(1918年10月31日付)。10月下旬から朝倉聯隊は聯隊長以下兵士のほぼ全員が感冒にやられ、軍隊としての機能を完全に失っていたわけだ。歩兵第44聯隊には健康な兵士が136名しかなくかつたという途方もない事実を確認することができる。

⁸² 『NHK』(2020年12月12日 放映)。

い経緯を遺族が知ることができないケースも多く 北海道弁護士会連合会憲法委員会事務局長の佐藤博文[1954]は言った。「自衛隊といふのは軍事組織ですから、秘密性といふのが一番なんですよね。われわれ弁護士から見ると、客観証拠を得るのが非常に難しいです」と。沖縄・山口・広島3県のコロナ感染拡大は“米軍由来”という線は考えられないだろうか。『沖縄タイムス』(2021年10月10日付)によると、「新規感染者の年代別では30代と70代がそれぞれ4人で最多。累計の感染者数は計4万9865人。死亡したのは、50~80代までの男女で累計は341人に上った」と。沖縄県では2022年1月6日、米軍基地内で新たに162人の感染が確認された。感染者数はキャンプ・ハンセンでクラスターが確認された昨年12月17日以降で累計1150人に達しており、感染拡大に歯止めが効かなかった。岩国基地(山口県岩国市)では6日に、新たに115人の感染を確認。市の発表によると、同基地での12月27日以降の感染者の累計数は537人であり、年末年始に急増している⁸³。

したがって、一般の市民が知る由がない闇の領域で、感染が増幅し、危険にさらされても、エクスーシアと言えども手も足も出ない。スペイン風邪の時も、今回も。^{いにしえ}

日本、否、世界の無責任の閉塞状況を打破するには、古の時代から連綿と続いた「田・山・湾の復活」⁸⁴の復権を実現させたい。生態の復興が生命線になると考える。里山、里海、田圃から離れた生活を送る勤労者の現実に目を轉じよう。20万円の給料を19万円に下げる労働者は文句を言う。「同じ仕事をしているやないか」と。輸入に依存している石油、食糧、地下資源の脆弱さをみんな知っている。物価が上がり、野菜の値段が倍になっているから怒る。インフレだと言われても納得がいかない。腸わたが煮えりかえっているところが20万円の給料を21万円に上げさえすれば、戈が収まる。「見よ、地上ではしばし穀物の値が下がり、人々は平和が来つつあると考えるだろう。だがその時こそ、地上に災いが咲き乱れるのだ。それは剣であり、飢えによる災いであり」(エズラ記[ラテン語]16:22)。ロシア・ウクライナ間の戦争は物価に大きな影響を与えていて。数字のマジックで騙される。ケインズ政策のやり方は、名目賃金の上昇、実質賃金の低下という手法である⁸⁵。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で有名な社会学者、経済学者であるドイツのマックス・ヴェーバー[1864-1920]は、「すべての国家は暴力の上に基礎づけられている」と言う⁸⁶。ヴェーバーは、「官僚制はひとたび完全に実施されると、『破壊することの最もっとも困難な社会形象の一つ』となること、「官僚制化(Bürokratisierung)を動かすのも止めるのも最高幹部だけである。ひとたびこの機構が存在する以上、これなしに済ますこともできないし、かといってこれをとりかえることもできない」と⁸⁷。

インフレで一番打撃を受けるのは、シングルマザー、貧困層⁸⁸、限界集落の高齢者たちである。そこで国家が介入する。紙幣をどんどん発行するのは常套手段。エクスーシアは、暴力的に裕福層に照準をあてる欺瞞的な手法で、錢を奪いとつて、そのおいしい部分は、官僚がいただく。わずかに残った部分を弱者にばらまく。資本主義経済の断面図である、と元外務官僚の佐藤優[1960-]は語る⁸⁹。

⁸³『赤旗』(2022年1月7日付)。山口県では、昨年12月23日～今年1月3日で142人の感染を確認し、そのうち約7割が岩国市に集中した。県の資料では、岩国市内の感染者のうち、岩国基地を利用した従業員や自衛隊関係者が16%、飲食店の従業員や利用者が32%に上ると指摘。飲食店はクリスマス時期に米軍関係者の利用が多かったため、米軍関係者の影響で感染が拡大したとみている。

⁸⁴拙論『田・山・湾の復活』宗教倫理学会2013年 関西大学飛鳥文化研究所。同(神戸松蔭女子学院大学東日本大震災チャリティコンサート&シンポジウム2012年)。

⁸⁵『ケインズ全集(第2巻)平和の経済的帰結』(ケインズ 早坂忠訳 東洋経済新報社 1977年)。

⁸⁶『職業としての政治』(マックス・ヴェーバー 脇圭平訳 岩波文庫 1999年9月)。

⁸⁷『ヴェーバー社会学の視圖』(阿閉吉男 効草書房 1976年59頁)。130ページには、資本主義は「経済の官僚制度化の先導者」と論じる。

⁸⁸経済的理由で過去1年間、必要な食料を買えないことがあった沖縄県内の子育て世帯は、ひとり親世帯で43%、両親がいる世帯でも25%。子どもの3人に1人が貧困状態『沖縄タイムス』(2017年6月1日付)。「離島の教育費、年収超え 公庫調査、200万未満では負担大きく」『琉球新報』(2022年2月10日付)。世帯年収に占める教育費の負担割合は、年収が低い世帯ほど大きくなり、年収200万円未満の世帯では89.0%。

⁸⁹『国家論』(佐藤優 NHKブックス 2008年 128-129頁)。

9. マスコミというツールはコモン(共有財)であれ

矜持を失った新聞は、SNS の発達に責任転嫁をしてはならない。昨今、40 代以下は新聞を購読していない。スマホで情報を入手している。したがって、大手の新聞社に入社してくる新卒の優秀な社員も新聞を読まない世代である。ニューヨーク・タイムズもオンライン化すると聞いた。新聞で育っていない人が記事のため取材し、編集し、発行していく時代が到来した。読者は言葉のコピペやフェイクニュースを識別する力がいるだろう。活字離れのため、購読者が減っているからといって、記者は消極的に考える必要はない。なぜなら書店数は減っていても、本屋では、哲学書、ビジネス書、文学など固い書物も平積みに販売されているからだ。またわたしは書籍を購入できる裕福さを持ち合わせていないという理由で新聞購読を止める気はない。ボランティア道のために、タウン誌などを含めると 8 紙は購読している。それらの報道紙面、とりわけ小さなコラム、読者の声、地方の息づかみから啓発されている。事実の裏付けのため、近くの複数の図書館を活用している。すると図書館で難解な書籍も多くの人々が読んでいることに気づかされる。外観が活字離れのように思えても、新聞社の価値は大きく、今の時代に必要な仕事である。マスコミというツールはコモン^⑨(共有財)だ。

大手新聞社が行政と包括連携協定をしている。戦前に戻っていることになろう。メディアの本質は、政権が舵取りを間違えるならば、クリティックするのが使命であろう。日本のエクスーシアに説明責任をはたさせるのが責務である^⑩。自分の足で歩き回り、庶民の呻きを伝え、血の通った共生社会を創る。貧しさへのセンサーを研ぎますべきである。お上の天下りである人物の事務所訪問という楽な仕事を活字化するようならば、市民はますます事実から乖離していく。新聞社自体が検証した本がある。『新聞と戦争』の上下 2 卷である。「朝日新聞は、中国政府が日本に抗議したことなどについては報じたが、自ら事実を掘り下げることはなかった。報道機関が本来の役割を果たさなかったことが、軍部の暴走を許した」、「真相を知った記者たちが、さらに確証を得ようと努めたり、軍の公式発表に反して謀略の真相を暴露しようとしたりした形跡はない」と^⑪。「ポストコロナ」にあって、第四の権力と言われる業界が、敗戦時、焼け野原の中で言論人としての使命を誓った時を忘却してほしくはない。刷新を祈りたい。死に体の国を救うのは他ならぬ記者魂に他ならない。

10. 立身出世主義觀が「自助・共助・公助」精神を醸成

「家助」(家族の援助)はハリケーン、サイクロン、台風、地震、津波、火山噴火後に、海外では一般的である。アフリカ、アジア、南太平洋の島々に行くと、必ず孤児がいる。親を病気、交通事故、離婚などが原因で失った子どもたちである。都会と異なり、田舎では、そうした孤児たちの世話はだれがするのか。例外なく、伯父伯母、祖父祖母たちが面倒を見ている。生きていく「助」を差し伸べるのは、「自助・共助・公助」ではない。「家助」である。2019 年 5 月 8 日、わたしはインドネシアのスマラウェシ島(Sulawesi island)パル(Palu)に 3 回目の

^⑨慣習法(コモン・ロー)で言うところの公的空間はコモンズではない。それは地域コミュニティによってではなく、国家によって創り出された領域なのであるから。……コモンズは文化的空間であり、私の所有するもののかなた、私の側にある荒地のかなたに存在している。……コモンズは多孔的である。同じ地点が、さまざまな人々によって多様な目的のために利用される。法律ではなく慣習が、コモンズを保護している。いかなる法律も、慣習の複雑さを吸収し尽くせるほど充分な柔軟性は持ちえない。『現代文明の危機と時代の精神』(エコクラシーアへの挑戦 イアン・イリイチ 山崎カヲル訳 岩波書店編集部 1984 年 36 頁)。イヴァン・イリイチ [1926-2002] オーストリア生まれ哲学者。1950 年頃に研究のために立ち寄ったニューヨークでプエルトリコ人のスラムに遭遇。ニューヨーク司教に願い出てプエルトリコ人街の教会の神父として赴任(1951 年)。当時、アメリカ最下層で暮らすマイアリティの人々のために奔走する。ウキペディア。

^⑩『人間を幸福にしない日本というシステム』(カレル・ヴァン・ウォルフレン 鈴木主税訳 新潮文庫 330 頁)。日本はうわべだけの民主主義国家になっている。こうした構造のなかで多くの「民主主義的」儀式が行なわれ、日本の市民を欺く偽りの現実が維持されている。うわべだけの民主主義のなかで実際に機能している権力システムは、「官僚独裁主義」と呼ぶべきものだ。(104 頁)

^⑪『新聞と戦争(上)』(朝日新聞「新聞と戦争」取材班 朝日新聞出版 2011 年 276-277, 280 頁)。

訪問をした。ペトボの液状化中に仮設小屋で4歳半の少年フイドラを訪問。震災時に11人の家族を亡くした。祖母のCarida Muhammad(58歳)さんが世話をしていた⁹³。

菅義偉[1948-]前首相⁹⁴は、「自助・共助・公助」⁹⁵という言葉を災害だけにとどまらず、コロナ禍対策にも援用していた。三つの「助」が用いられている。自助、自己責任、官からの無援だから、がんばるようにエクスーシアある者たちが言う。さらに、自助の次が共助と言えるだろうか。「共助」とは、「地域や仲間、みんなで助け合うこと。しかし、わたしたちが佐賀水害ボランティアで見て、仕え、痛感したことがある。わたしは報告した。⁹⁶

「六角川の氾濫によりドロで覆われた家を大町町から隣町の武雄市北方町で老夫婦がドロ出しをしていました。東京にいる子どもたちはコロナ禍のため帰って来ることができないと嘆いていた」⁹⁷。

災害地で最も助けになるのは、「自助・共助・公助」ではなく、これまでの被災地支縁で目撃するのは、「家助」であった。とくに「県外ボランティアお断り」の影響により、決定的な人手不足を被災地で目撃してきた。市会・県会議員はやって来ない。首長や国会議員については瞬間風速のように通過するだけである。日本の政治家は選挙に当選することを至上命題としている。限界集落は票にならない。被災者にとり、頼みにできたのは政・官・財・学ではないことは明白である。ボランティアが即有用な助けだった、と何度も耳にした。直後だけでなく、中長期にわたる心の復興が望まれる。震災によるトラウマ、喪失感、悲しみはすぐに氷解はしない。種々千差万別の苦悩に寄り添う「はたらき」には感情移入が最も必要とされる。感情移入にはスピリチュアリティが必要である。およそ宗教的実践の基幹には、他の人々に対するあたたかい共感の心情を必要とする。仏教では、この心情をその純粋なかたちにおいて慈悲⁹⁸として把握する。

ヒンドゥー教の詩人トルスイダースは、「慈悲は宗教の根源 罪の根源は傲慢トルスイーはいう 身体に命ある限り慈悲を捨てないように」と歌った⁹⁹。イスラーム教徒も、「また、われらがあなたを遣わしたのは、全被造物への慈悲ゆえに外ならない」も慈悲を心がける(クルアーン¹⁰⁰ 21:107)。2022年2月25日、日本最古の神戸ムスリムモスクでイマーム(指導者)を務めるムhammad・ジャファルに「阪神宗教者の会」で「イスラーム教はこわくない」の主題で話してもらった。孤児たちにどのように慈悲を示すかについて、彼はクルアーンを引用し朗読した。「また、孤児に彼らの財産を与えるのだ。……また彼らの財産を、あなた方の財産と一緒にたにして貪ってはならない。本当にそれは大きな罪なのだから」(クルアーン 147:2)。「近親の者にその権利を与える。また、貧者(アラビア語 ミスキーン)と旅路で苦境にある者にも与えるのだ」(クルアーン 565:26)を朗読し、正しい信仰と実践を行なうなら、テロをする気にはなれないはずだと言った。「慈悲」は普遍的な世界の普遍宗教に共通する価値観である。「普遍」¹⁰¹とは、「国家」、国境、民族を乗り越えた人類が共通の基準にできるものだ。

⁹³『ラダースルテン紙』(2019年5月10日付)。 <http://kisokobe.sub.jp/international/12738/>

⁹⁴イチゴ農家の息子。2020年第99代内閣総理大臣。384日で幕引き。息子の大成建設◇辺野古基地◇新国立競技場◇リニア新幹線◇NHK3400億円社屋。行政は、自助や共助の強化を説いている。

⁹⁵「自助」家庭で日頃から災害に備えたり、緊急時には事前に避難したりするなど、自分で守る事。「共助」とは、「地域や仲間、みんなで助け合うこと」「公助」市町村や消防、県や警察、自衛隊といった機関による救助・援助。

⁹⁶拙論『ダムと伐(ばつ)ー第5次佐賀水害ボランティア報告』(「小さくされた人々のための福音」講座2021年6頁)。

⁹⁷「慈」と「悲」とは別語である。「慈」とはパーリ語の mettā、サンスクリット語の maitī(または maitrā)という語の訳である。この原語は語源的には「友」「親しきもの」を意味する mita という語から派生語であって、眞実の友情、純粋の親愛の念を意味するものであり、インド一般にその意味に解せられている。これに対して「悲」とはパーリ語及びサンスクリット語の karunā の訳であるが、インド一般の文献においては「哀憐」「同情」「やさしさ」「あわれみ」「なき」を意味するものである。しかば、慈悲とどうちがうか、ということが問題となる。南方アジアの上座部仏教においては、「慈」(mettā)とは即ち「(同朋に)利益と安樂をもたらそうと望むこと」(hitasukhupanayana-kamata)であり、悲(karunā)とは即ち「(同朋から)不利益と苦痛を除去しようと欲すること」(ahitadukkha-panya-kamata)であると註解している。『慈悲』(中村元 講談社学術文庫2020年32-33頁)。

⁹⁸『真の独立への道』(M.K.ガーンディー 田中敏雄訳 岩波文庫 2005年 107頁)。16世紀に人格神ラーマへの絶対帰依を説いた。

⁹⁹『クルアーン(コーラン)』(佐藤裕一訳 ファハド国王マディーナ・クルアーン印刷コンプレックス 2014年)。

¹⁰⁰東アジアにおいて、歴史上統一した世界帝国ができなかつたこと。中国と韓国の主流は大陸の農耕文明、儒家文化、大乗仏教。モンゴル、チベット、寧夏回族自治区は内陸アジアの遊牧文明で、イスラーム教、チベット仏教を。島国の日本は西洋の海洋文明に近似、独自の神道。『普遍的価値を求める』(許紀霖・中島隆博・王前法政大学出版局 2020年 28-29頁)。

浄土宗の開祖である法然[1133–1212]は飢饉、疫病が蔓延し、物質的、精神的に痛めつけられていた庶民の苦しみを自分の苦しみとして知っていた。法然は自分について吐露した。「かなしきかな……；いかがせん……ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学のうつは物にあらず」、と¹⁰¹。法然はどうてい三学をものにできる人間ではない、と嘆息。慈悲といふ資質があるなら、学歴¹⁰²、資格、専門性などは不要である。逆説で考えるなら、明治に入り、慈悲心が立身出世主義の価値観にして、人々の心に巣くった。だから、他者の苦に入り込み、それをある程度共にすることがきる能力はない。助けを呼び求める呻きを聞いた時、どきつとする心的性質の表れも麻痺している。誰かが傷つけられているのを見たら、己れの無力感におののく。他者の苦の前に自分ももだえる。不実行で自分を責めているのではない。「靈性」が敏感に反応しているのだ。仏教的靈性とキリスト教的靈性との間には興味深い類似性がある¹⁰³。いわばその感性が枯渇していない人は動き出す。「ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い」と同じセンサーが働くにちがいなし(レカ 10:33)。無名の宗教者が大悲を継続している痕跡は、阪神・淡路大震災、東日本大震災、近年の被災地に顕著であろう。「右の手のしていることを左の手に知らせてはならない」という勧めのゆえに目立たないだけである(マタイ 6:3)。宗教系メディアも、日刊紙と同様に、神学者(学者)、大きな教団、教派(行政機関)や、被災地で布教(ビジネス)に成功している数字中心の成果に偏っていまいか。家族、家屋、仕事を失った被災者にとり、何が必要があまりにも鈍感である。苦惱が活字になっていない。新自由主義経済は困窮生活を余儀なくされている貧者の呻きを黙殺している。どんな展開になってきたか。流れを考えるべきであろう。新自由主義経済政策⇒階級格差⇒貧困⇒苦難⇒悪に至る。そのような悪に染まった社会へと人間を貶めた。巨悪の権化がさらなる不幸の波をもたらす。「私たちの戦い(pale pale<戦い、格闘、組打ちの意>)」は、人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸靈に対するものだからです」にあるエクスーシアに対する志願(ボランティア)した兵士でもある¹⁰⁴(エフェソス 6:12)。

2019年10月12日、台風19号が千葉、福島県、宮城県を襲った。災害からの立ち直りのため、最初の緒に就くことは、「家助」による家具搬出などの現場にあつた。次に、近隣との相互扶助、団結といふ共生である。三番目に、内面のリアリティを回復するためボランティアが現場で取りかかる「はたらき」は、喪失しかかっていた「家助」である。相互扶助、団結といふリアリティを回復することが命題になる¹⁰⁵。

なぜ実家が古今未曾有の困難、試練、再起不能に陥っているにもかかわらず、子どもたちは都会から帰って来ないのか。ドロ出し、がれき処理、使えなくなった家具などの搬出を手伝わないのか。帰郷しない言い訳をコロナウイルスのせいだと今は理由にしている。そうではない。たとえコロナ禍が終焉しても大きくは変化しないだろう。本稿の目的である共生社会を目指すために何が問題かについて、最初に、歴史的検証をしてきた。次に、道徳的価値への覚醒。つまりコロナ後の価値観について挑戦しなければ、「底辺」の人々に光は当たらない。普遍的な志向が求められよう。

11. 立身出世主義

生まれ育ったふる里を襲う災害。そこで育ってくれた親は年齢も増し、若い時のようには、動けなくなっている。被災したというのに、家族関係が疎遠になっていないだろうか。ボランティアで被災地を訪問して、痛感することがある。団塊の世代は、「ここにかつて映画館があつたべ」、と喫茶店、ブティック、娯楽施設、繁華街が

¹⁰¹『法然上人全集』(石井教道編 平楽寺書店 1997年 460頁)。①戒学(戒律)・②定学(心を安静に)、③慧学(知恵)の三学のこと。『岩波仏教辞典』(同 310頁)。

¹⁰²学歴分断線がある限り、希望を持てない層もいつまでもある。日本は子どもを大卒にできる勝ち組家族と、大卒にできない負け組家族に分化する「格差社会」の到来を予測する学者もいる。『学歴分断社会』(吉川徹ちくま新書 2009年 190,209頁)。

¹⁰³『キリスト教 本質と歴史』(H.キュンク福田誠二訳 教文館 2020年 326頁)。以下、『キュンク』。

¹⁰⁴拙論「キリスト教とボランティア道」(宗教者災害支援連絡会[宗援連] 東京大学 2015年 20頁)。“帝国陸軍は国家に忠実な兵士 soldier を成しましたが、一方、中野学校は「志願兵、義勇兵」volunteer の養成機関でした。”

¹⁰⁵拙稿「台風19号ボランティア報告」2019年10月11-17日 <http://kisokobesub.jp/article/15302/>

消えたと語る。懐かしく追憶を語る。限界集落と都会、シャッター通りとモダンなアミューズメント、子どもの声が聞こえない公園と通勤・通学ラッシュのコントラストは過疎、高齢化、少子化の悲劇の産物である。

いつ変わってきたのか。災害後、自己責任の冷たい風潮は「立身出世主義」¹⁰⁶によって近代化、天皇国体の中心帰一、脱亜入欧に拍車をかけた。並行して、伝統宗教も沈滞している。

日本では、明治維新以降、価値観が立身出世主義となる。青年の世界観に最も大きな影響を与えた著作は『学問のすゝめ』(福沢諭吉 1872[明治 5]年)であろう¹⁰⁷。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と、一見、平等を説くように思える。しかし、元はと言えば、福沢が米国の独立宣言を下敷きにしたものだ。オリジナルではない。「……に人を造らず」に「と言えり」が続く。アメリカ独立宣言に大きな影響を与えたジョン・ロック¹⁰⁸の生命・自由・幸福の私人論を継承した。つまりアメリカン・ドリーム=立身出世主義である。人は、生まれながらに、貴賤貧富の別なし。ただ、良く学ぶ者は、貴人となり、富人となり、そして、無学なる者は、貧人となり、下人となる。だれであっても勤勉に励むならば、立身出世できるというのが福沢の営為であった¹⁰⁹。競争社会、富国強兵政策、階層社会の柿落としになった書籍のひとつである。福沢は言う。

「世の中に無知文盲の民ほど憐れむべく、また憎むべきものはあらず」、という「天は人の下に人を造る」という思想家であった¹¹⁰。闇の部分に覆いをしたままではいけないだろう。立身出世主義の残滓に、明治から平成の初頭にかけて、学校の卒業式で歌われてきた『仰げば尊し』がある。「身をたて名をあげやよはげめよ」という歌詞にも表れている。生まれ育った家を出て、一旗を揚げることが一人前の証明になった。勤労青年たちは田舎を離れ、不馴れた都會生活になった。疎外感、機械化、孤独を埋め合わせてくれたのが組織、新々宗教、伝統宗教だった。男性だけでなく、結婚の対象となる異性がいる生活圏の東京へ民族移動が行われていった。故郷に錦の旗をあげるという成功組はほんの少数にすぎない。「うさぎ追いし」の故郷と異なる生活スタイルに順応していく。

明治維新(1868 年)、福沢諭吉による立身出世主義、維新政府に登用された吉田松陰[1830-1859]の弟子たちは松下村塾で「脱亜」ではなく、「亜細亜への侵略」思想を学んでいた¹¹¹。大久保利通[1830-1878]による議会を通さず、政策を立案、実施する官僚中心の政治、「有司專制」¹¹²が日本の国家の骨格となっていく。民衆は立身出世主義による成功と消費が第一義的な目標になる養育、教育、成育を受ける。日本は 1930 年代にドイツナチズムの影響を受けることによって、優生思想¹¹³が萌芽する環境につながった。米国歴史家であるテオドール・ドライバー[1912-2006]は、「人々のうちに徳というものが一切ないのに、いかなる政府の形態であっても自由や幸福を保障するだろうなどと考えるのは幻想である」¹¹⁴、とアメリカ制度の弱点を指摘している。

¹⁰⁶ 「立身」とは、元々「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」『孝經』(身ヲ立テ道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚ゲ以テ父母ヲ顯スハ、孝ノ終リナリ)から来た儒学の用語。

¹⁰⁷ 『学問のすゝめ』(福沢諭吉 岩波書店 2021 年 11 頁)。

¹⁰⁸ ジョン・ロック[1632-1704] 英国の哲学者。『統治二論』によってアメリカ独立宣言、フランス人権宣言にも大きな影響を与えた。アメリカ独立宣言の執筆者のひとりであるトマス・ジェファーソン[1743-1826]「アメリア建国の父」。第 3 代大統領(在任 1801-09)たちから福沢は受け継いだ。

¹⁰⁹ 『諭吉の愉快と漱石の憂鬱』(竹内真澄 花伝者 2020 年 37-40 頁)。

¹¹⁰ 『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』(安川寿之輔 株式会社高文研 2006 年 328-330 頁)。

¹¹¹ 吉田松陰は、和歌「かくすればぐくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」と謳い、日本人だけが満達できる大和魂に基づく「大日本主義」を唱えた。伊藤博文、夏目漱石に影響を与えた。拙稿『第 1 次北海道地震ボランティア(2)アイヌ資料館も被災、「土人」として差別された歴史』<https://www.christiantoday.co.jp/articles/26062/20180926/1nd-earthquake-volunteer-report-2-yoshio-iwamura.htm>

¹¹² 明治政府の政治が、政府内の特定藩閥政治家数名で行われていると批判された時に用いられた言葉。学問的には 1873(明治 6)年に大久保利通の主導権に始まった官僚政治を指す。

¹¹³ 19 世紀以降、生物の品種改良を人間に適用して、アブリオリ(先天的)障壁があると上からのエクスーシアが生殖に介入したことに起因。外觀から格付けを行なって、日本でも 1996 年に母体保護法が改正されるまで、ナチズムと同じ発想が産児制限・人種改良・遺伝子操作などに影響を与えている。清野謙次[1885-1955]京都帝大医学部 人骨の測定調査 石器時代人≠アイヌ 石器時代人=日本人。石器時代人は後の進化と南北隣接の人種の混合→現代日本民族という思想につながった。倫理学、著書『風土』の和辻哲郎[1889-1960]や、民俗学者の柳田國男[1875-1962]も受け入れた。<http://kisokobe.sub.jp/intemational/9878/> 拙稿『第 3 次バヌアツ・ボランティア報告』(2017 年)。

¹¹⁴ "Hume and Madison" Theodore Draper, The Secrets of Federalist Paper No.10, Encounter 58, 1982 p.254.

12.「自助・共助・公助」

若者はいざぐなつた、先祖から守ってきた里山、里海、田園にしがみつくのは高齢の者ばかりである。農・林・漁に後継者はいらない。自分たちの世代で終わろうと覚悟している。そこへ災害が牙をむいた。

「共助」とは、「地域や仲間、みんなで助け合うこと。総合地球環境学研究所所長の山極寿一は、「農業は共感力を高め、共助の精神を醸成する仕組みだった」¹¹⁵、と共同体のきずなに寄与していたと言う。

日本には、互酬 Reciprocity というボランティア精神があった。貧しい人の軒下にそっと食べ物を置いておく。「陰徳」という助け合いも珍しくなかった。「陰徳」¹¹⁶が「互酬」へと発展した。たとえば、田植えに協力してもらえば、刈り入れの時は手伝いにいく‘お返し主義’が存在した。3.11直後、日本中が金銭勘定や自己責任とやらを脇に追いやって、と人のつながりに目覚め、「私も役に立ちたい」との思いを強くした。市場経済や交換経済のなかで生きていたはずの日本人が、突如、贈与と互酬の経済に復帰したかの感があった。交換原理が支配する現代社会では、エクスーシアは危急の際、各人が身を守るのは「自助」だと自覚させる。そのため各人は嘗々と貯蓄に励み、致富をめざす。頼りは金のみ。そう思わされてきた。これに対して互酬の経済社会では、いざというときモノをいうのは貯えでない。援助のネットワークつまり「互助」「共助」である¹¹⁷。津波ですべて流失したあと、被災者にとっていちばん心強かったのは「金」ではなく「絆」であった。

高度成長時代となり、地方から大都市へ働きに行く若者が増えた。核家族化し、大家族制を維持し、子供が親の面倒を見ることは実質的にできなくなった。「町内会」自体は「大政翼賛會」の下部組織として誕生した¹¹⁸。南京大虐殺[1937年12月]には、町内会こぞって提灯をもって行進し祝つたりした。町内会はそれまであった隣近所が助け合う「隣保」という良き風習を吹き飛ばしてしまった。町内会でも貧困に陥った家庭を経済的に「支縁」することはない。慶弔時の支払い、重病人が出た時に、看護、介護できる施設を紹介したりするのがやつである。今日、民生委員のはたらきも青息吐息である。身寄りのない人の面倒は社会全体で見るべきであるという声がある。エクスーシアは、ひとつに「共助」である公的年金制度があるではないかといふ。しかし、年金は恩給から移行したとはいえ、戦争の影をひきずっている¹¹⁹。「公助」とは、市町村や消防、県や警察、自衛隊といった機関による救助・援助である。

つまり台湾と中国の間で、魚釣島、尖閣諸島で、ウクライナのように戦争が勃発するとき、公助である年金が制度として機能する。戸籍制度、年金制度、徴兵制度は同根である。大家族、隣保、社会でもっとも恵まれない人を最大に配慮することは「国家」の思惑のトップダウンでは機能してこなかった。2012年、総務省「就業構造基本統計調査」によると非正規2012万人(38.0%)。その内訳は、55-64歳419万人、パート967万人、アルバイト414万人、契約社員289万人である。淨土真宗大谷派僧侶の川浪剛[1961-]¹²⁰に、2013年5月27日、「死」を考える講座¹²¹で「ホームレスの末路」を話していただいた。エクスーシアは過疎、高齢化、少子化をむしろ増産してきただろう。困ったときに、お手上も無策、町内会も人手不足、家族もいらない中で、災害をどうやって乗り切るのか。2017年6月、ボランティア受け入れの窓口になる社会福祉協議会は、東日本大震災後にできた災害ボランティア支援団体の全国ネットワーク JVOAD(Japan Voluntary Organizations Active in Disaster)と

¹¹⁵『朝日新聞』(2022年2月10日付)拙論「キリスト教とボランティア道」(第26回宗教者災害支援連絡会 東京大学2016年)。

¹¹⁶拙論「キリスト教とボランティア道」(同)。

¹¹⁷山田鋭夫(九州産業大学経済学部教授 生活経済政策 2011年10月号掲載)。

¹¹⁸『無縁社会の正体』(橋木俊詔 PHP研究所 2011年136-139頁)。

¹¹⁹公的年金は戦争の影を引きずっている。古代ローマ時代に、退役後の生活保障、傷痍軍人、戦没者遺族の生活保障だった。日本では1873[明治6]年の徴兵制制度が激かずやいなや、農民はこれに反対して各地で一揆を起こした。「徴兵告諭」で徴兵を血税と称したので、血税一揆が全国的に起きた。懐柔策として、2年後に軍人恩給が出された。「公助」は約150年、戦争と二人三脚で続けてきた。1986年に国民皆年金と受け継がれた。「明治の有能ではあるが専制的な官僚が、……徴兵軍隊は、老齢で先見の明をもった人々の手に握られて、強力な政治的武器となつた」(『日本の兵士と農民』E.H.ノーマン 大塚洋二訳 岩波書店1958年81-82頁)。こうりよ

¹²⁰川浪僧侶は日雇労働者の父をもち、自らは不登校や路上生活を経験するなど、釜ヶ崎で「行旅死亡人」、「無縁仏」を手厚く葬ってきた。

¹²¹「死」を考える講座 <http://mamowth.com/>

連携した。協議会は、感染拡大防止のため「県外お断り」の方針を打ち出した¹²²。それは「家助」がない独居の高齢者などを度外視している「悪」の取り決めだ。

2020年7月4日、球磨川氾濫による50名の死者。約1,020ha、約6,100戸の泥の被害があった際、わたしたちは熊本県芦北町の町長室で地図を広げていただき、被害状況を聞いていた。芦北町の吉尾地区に一件しかない医療施設。そこもドロで覆わされて診察、治療、薬剤は崩壊していた。

権威者が人権を犠牲にして国の利益を優先すると、「国、破れて山河あり」(杜甫の律詩)の社会が再現される。

災害大国といわれる日本で、「ポストコロナ」、医療崩壊、ウクライナ戦争後に、社会の共同体の共通善について、どうすべきかが本稿の課題である。

13. 後見人ボランティア

後見人ボランティアを阪神・淡路大震災以降に携わっている。たとえば、酒井利栄子[1937-]はマイノリティー¹²³である。2003年から関わっている。彼女は被差別部落、在日外国人、LGBT[Lesbian(レズビアン 女性同性愛者), Gay(ゲイ 男性同性愛者), Bisexual(バイセクシュアル 両性愛者), Transgender(トランスジェンダー 性別越境者)], Questioning(クエスチョニング自分の性別や性的指向をハッキリと決められなかつたり、迷つたりしている人、または決めたくない、決めないとしている人)ではない。心身障がい者に分類される。傷害者手帳を持っている。しかし、教団、教派を超えた聖書展示館である神戸バイブル・ハウス[KBH]を2001年に再建し、セミナーなどを開いていた。利他精神の旺盛な酒井は、いろいろな集会に出席した。独身であり、住まいから近距離であったことも関係した。悪意ではなく、親切心から積極的に会合で、タイミングをわきまえず、講師の話をさえぎることがしばしばあった。キリスト教世界を代表する理事長や理事たちは理事会で、他の参加者の足並みを乱すという理由で、出入り禁止の二人に彼女を含めた。しかし、彼女たちの言動について責任をとることで、常務理事兼常任理事であるわたしは排除という意見に徹底して反対した。2004年、議案は流れた。財産管理などの公的ではない後見人ボランティアを引き受ける動機は親友を失ったことにある。その後、彼女宅は火災が起り、住む場所がなくなった。火の不始末が原因と海上警察は判断した。それからというもの落ち着く先を転々とする。身元引受人として交番、警察署へ何度も足を運ぶ日々が続いた。妻カヨ子は生活が振り回される中でも、協力してくれた。2011年7月14日、KBHの関係者は神戸市兵庫区の湊川病院に隔離という手段を講じた。わたしが入院手続きをし、本人に引導を渡す担当になった。およそ2年の隔離病棟生活であった。統合失調症であっても、健常者なみの生活できると、栄澤紀子医師は判断した。栄澤は神戸国際支縁機構の後見人ボランティアのよき理解者であった。2013年5月31日に現在のそんぽの家(当時アミーユ)に入居。兄の酒井彰(2021年秋以降、認知症で入院)、故久美子夫婦が本人の年金から自動引落した。今日まで、健やかに生活を続けている。湊川病院と番長診療所の二つの病院にお連れし、共食する後見人ボランティアは12年に及んでいる。

1989年、ものの塔協会から大量離脱した仲間のひとり戸村若文[1955-2010]も同じ病状が発症した。戸村が通い出した福音派キリスト教会は、幻聴などで大声を出すことに困惑した。本人、わたしの同意なしに、1990年、神戸市北区の光風病院に隔離した¹²⁴。その時、医療の制度に疑義を感じ始めた。わたしのケアは彼の病をいやすどころか悪化の一途を辿った。病をいやすことのできない宗教者は無価値と自分を責める日々が

¹²²『毎日新聞』(2021年3月5日付)。湯谷茂樹編集者から、ボランティアの実体についてインタビューを受け、6段記事となった。

¹²³ minority, minorities その社会にあって、「はじき出されている」=「のけものにされている」人々や集団のこと。『マイノリティーとは何か—概念と政策の比較社会学—』(編集者岩間暁子、ユ・ヒジョン・ミネルヴァ書房 2007年 56頁)。

¹²⁴ らい、予防法のもとで長年続いた強制隔離政策、旧優生保護法による不妊手術の強制、精神保健福祉法による精神障害者の非自発的入院制度があった。多数派にとり当たり前の配慮(入院させて治療することが、本人にとって測り知れない苦痛(例えれば、自分の意思に基づいた自由な生活ができないこと)をもたらす。憲法25条は、「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」つまり生存権が保障されている。『精神障害と人権』(横藤田誠 法律文化社 2020年 100-101 頁)。

続いた。戸村の母親佐千枝[1928-]は、別の病院で入院中の息子若文に対する加療について、言い放った。「病人は犯罪者ではない。人間扱いをしていない」と嘆た。本人を一日おきに見舞い、語らいを続けていた。その二日後、2010年10月17日、病院で息子が息を引き取った。点滴の管を本人が外したという原因だった。1995年に産声をあげた神戸国際キリスト教会の牧師として死の陰の谷で狼狽した。弟鉄男が2010年3月29日に他界。ベッドで意識を回復した時、「お兄ちゃんがこわい。たたかれた」と幼少時を思い出して、家族に訴えていた。半世紀以上も前のことだが、被害者である弟は忘れていた。残された配偶者の真澄からそのことを聞いた時、良き兄と独りよがりに思っていたわたしは狼狽した。臨終の間際で、弟はわたしへの恨を吐露した。火葬場で骨になって出てきた弟の骸を周囲にはばからず口に入れた。小学校低学年のみいたちは驚いて、正気を失った伯父の姿に圧倒されていたがいい。それ以来、宣教はするが、伝道回心者をつくるを辞めた。釜ヶ崎の貧民街に学生たちと出かけていても、戸村、弟の亡靈に謝り続けた。そんな生きた屍のような生氣を失ったわたしの目に大津波が襲ってきた。東日本大震災で死者と語らう境界線を越えるミステリアスな体験も、死の延長線上にあったのではと、思させられた。

酒井利栄子が2022年1月に骨折して、神戸市長田区にあるホーム近くの形成外科野瀬病院に入院した。神戸大学医学部のS医師が担当した。コロナ禍の厳重な体制とは言え、面会はできない。わたしは12年近く彼女に寄り添ってきた。ベッドから落ちたため骨折。洗濯物、おしめ、パットなどを定期的に届ける役割である。「〇〇を持って来て」と看護士から携帯に入ってくる。50分かけて、持つて行くと、リースに切り替えたから「いらない」とすぐない返事。患者側は反論できる立場がない。医療側と患者の上下関係は卑屈さを生む。入退院時の手続き、諸費用の一切をわたしは支払った。ボランティアはキーパーソンとなる家族から一円ももらっていない。しかし、病院側のEO看護主任は、回復状況については、一切、問うても教えない。退院後の病院への搬送など、骨折について知りたいからである。くどく尋ねると、制度だから、と鉄面皮に質問を遮った。家族ならということで、横浜にいる姉西上千栄子[1935-]にお願いをして聞いてもらうが、医者のコメントはない。入院に際して、MY支援員なる存在も官僚制度の典型であろう。患者を与える病院としてのミッションは市民に伝わらない。支援員は病院のマネジメント面に冷徹なほど、事務処理に忠実に仕えている。アウシュビツのアイヒマンを思わせる。コロナウイルスによる医療崩壊の断面図が顕著に表れている。受付や、掃除に携わる使用人は入退院患者に親切だが、人材不足の中で戦っている看護責任者、支援員にはどうやら人間味は残っていないようだ。官尊民卑の病原菌に感染している自覚症状がないことが不幸である。世の中が、人間味を抹消した制度には辟易としている。制度が病人を保護するどころか破壊の過程が促進している。ケアマネジャー制度も同様の特性がある。高齢者、末期ガン患者、障がいをお持ちの方はいつ何時、容体が変化するかわからない。にもかかわらず、キーパーソンとなる家族にもケアマネージャーは携帯番号も教えない。患者のためではなく、制度を維持する管理職的存在である。米国の社会思想家イヴァン・イリッチ[1926-2002]が著書“Limits to Medicine”¹²⁵で強調するように、診断的権威、つまりエクスーシアが医療の最先端で渦を巻いている。イリッチは近代的制度の本質を鋭く指摘している。社会が学校化していることに対して、どのように社会を脱学校化するかを論述している¹²⁶。

イリッチ著『脱学校の社会』は、すぐに想起することがある。東日本大震災が発生し、陸の孤島として、連絡がとれなくなった牡鹿半島に阿部捷一[1942-2017]、新免貢、佐藤金一郎[1941-]の4名で2011年7月に各学校を訪問した。神戸国際支縁機構の石巻支所長の阿部捷一は元校長として、地元の住民となんとか連絡がとれた。過疎、高齢少子化、多死社会による限界集落が津波に覆われ、地図通りの道路は呑み込まれていた。宮城県牡鹿郡名振で畠山貫梁住職たちとの話し合い¹²⁷の一部を振り返る。

¹²⁵ Limits to Medicine Medical Nemesis: The Expropriation of Health Ivan Illich, Marion Boyars, 1976

¹²⁶ 『脱学校の社会』(イヴァン・イリッチ 東洋・小澤周三訳 東京創元社 1978年15頁)。

¹²⁷ 被災地教育ヒアリング 2011年7月13日名振コミュニティセンター WEB「牡鹿半島 聞き取り調査 (3)名振」<http://kisokobe.sub.jp/proposal/1035/>
『希望の灯(もしむし)船越小学校とともに』(共著 坂本忠厚 2013年 102-105頁)

畠山:「持論ですが、教育が進めば進むほど、過疎が進む。」

新免:「当たっていますね。世の中のシステムがそうなっているからです。知識を教えれば、教えるほど、人々は漁業、農業から離れていく世の中でしょう。」

岩村:「教育と言えば、野口英世のお母さんのように教育熱心な場合がございます。人様のお役に立てるように教育すればよいのですが、人を押しのけて、お金儲けさえできればよいのだと学歴をとらせるのなら、ご住職がおっしゃるように寂しい限りですね。人を出し抜いて、金儲けの教育、ラベルの教育では困ります。」

畠山:「そうなんですね。」

岩村:「今、猫も杓子も大学へ行く時代に、日本の価値観で欠けている視点をご住職はおっしゃっていますね。教育が進めば進むほど、過疎が進むとは的を射ていますね。」

新免:「荻浜中学校で教育実習指導を行った時、仙台で教えていた先生たちは牡鹿半島に転勤してくると違いがあると言っておられましたことに驚きましたね。なんでもかんでも受験の仙台と異なり、体が強くなり、厚着をしたまま遠泳ができるとか、必ずしもすべてが大学へ進学しなくてもいいんだよという考え方なんですよ。仙台市内の人とは基本的に考え方方が違うんです。それでびっくりしたと聞きました。都会とは違った暮らし方があることをもっと大事にしないといけないでしょうに。そうしたものを大事にしたから東日本の沿岸沿いがかなり繁栄したと思うんですね。今、そこにも都会の考え方が導入されたら、漁師さんは大学を出ないといけない時代が来ることになってしまいます。窮屈になります。」

阿部:「教育が進めば進むほど、過疎が進むという場合、教育の中身が問題です。子供たちを考えると、子供たちの地域を大事にしていく。いい自然があるわけですから。」

大都会一極集中により、取り残された集落は存亡の危機が漂っていた。畠山が提言するように、脱学校化に舵を取ることが被災地の復興のひとつの選択肢と言えるのではないか。

14. 共生

SNS が普及し、食事時間の不一致、家族団らんの思い出は極端に減り、核家族、単身世帯が当たり前になっている。2022 年 1 月 10 日、雪が舞う中、熊本県球磨郡相良で田起の後、人吉市にある国宝青井阿蘇神社の福川義文宮司にあいさつをした。^{くま さがら たおこし}正月 3 日間は 6 万人の初詣でにぎわった¹²⁸。相良 700 年の歴史がある。小京都と言われる人吉市に喫茶店、映画館はない。地元では「青いさん」と人吉市近辺の人たちの心のよりどころである。「節分」などは祝わないそうだ。「鬼は外、福は内」のように、排除する行事は神の教えにそぐわないとのこと¹²⁹。他の宗教も見習うべきだろう。さらに、神社の立石芳利氏から賽銭の意義について聞いた。神様が食べる米などの供え物の代わりに後代になって、賽銭箱に米の代わりに錢を献じる散銭を入れるようになった¹³⁰。それは供え物を神と一緒に食べるのが目的であると説明を聞いた。神と共に食すると聞いて、ガリラヤ湖畔でキリストと群衆の共食¹³¹の場面を思い浮かべた。本田哲郎訳の見出しには、「痛みを共有し、荒れ野でわずかな食べ物を分け合って、五千人が満ち足りる」とある¹³²。また創世記でアベルの獻げ

¹²⁸ 季刊誌『支縁』No.38(神戸国際支縁機構 2022 年 2 月 1 頁)。

¹²⁹ 「みんなで語ろう 鬼は外」(『朝日新聞』読者のオピニオン 2020 年 2 月 1 日付)。“異端の存在を許容しない心”心の奥底に容易に絡みつく差別、偏見、排除觀はヘイトスピーチ(hate speech)につながる。

¹³⁰ 神仏に献げる供物の一つ。神前に米を撒く散米、あるいは米を紙に包んで備えるオヒネリであった。宮城県石巻市渡波の大國龍笙宮司は毎年、「新嘗祭」で一緒に飲もうとわたしを誘う。11 月の稻刈りの収穫祭である。天皇が新しい穀物を神と共に食す、という祭り。イスラエルの大祭司と大國宮司は同じけたらきであろう。『神道辞典』鯉渕友南 國學院大學日本文化研究所弘文堂 1999 年 204 頁)。

¹³¹ イエスの日常的な生における罪人や取税人との食事、或いは復活における弟子たちとの喜びの食事を視野に入れること。聖靈降下を求める祈りによって成就する。

¹³² マタイ 14:13-21、マルコ 6:33-44、ルカ 9:11-17、ヨハネ 6:1-13 など。権威者が『仕える』べき神とは、言うまでもなく、救いの歴史を通して現された神、『低く下って天と地をご覧になる』神であり(詩 113:6)、「民の苦しみをつぶさに見、追い使者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った』神

物は神の取り分として神が食べたと考えてみるとよい¹³³。共生を意味する英語シンビオウシス(Symbiosis)は、ギリシャ語 σύμβιοσις (σύν <共に> + βίος <生きるの意>)から派生した¹³⁴。シンビオウシスは、異なる生物種間の相互依存関係、相利共生、相互に利益を得る営為のことである¹³⁵。社会学者の村田充八は、「共生」を「死に支え」と置き換えて論及している¹³⁶。イリッチがシンビオウシスについて述べる「共生」コンヴィヴィアリティConvivialityの視点を取り上げた村田の視点から教えられた。

コンヴィヴィアリティの語源はラテン語convivium (con <共に> + vivere <英語の live 「生きる」の意>)から由来している。社会における個人とグループ間の相互協力、特に、生態学的な相互依存が含まれるトポスに「焼き出し」という文化的共生¹³⁷があるだろう。人々が祝祭や毎年の宗教的な祝いに集まって共に食事をしている。毎週木曜日、2014年4月から、焼き出しをしている。路上生活者と共に食する。そこは「神の国」である。最も小さくされた兄弟たちが炊事、調理、運搬をして仕えている。「神の国は、飲み食いではなく、聖靈によって与えられる義と平和と喜びなのです」と示されている。飢餓、貧困、戦争の危険性がない千年王国のような物理的な新世界を「神の国」と言っているのではない。「義」、「平和」、「喜び」といった靈的、不可視性、超越的な森である(ローマ 14:17)。「それは待ち望むことでは来ない。それは、『見よここにある』とも『見よそこにある』とも言えない。そうではなくて、父の王的支配は、この地上に広がっている。そして人々はそれを見ないのだ」(トマス 113)。

シンビオウシスのビオス(生命)は、人間、生物、植物を生かしている。神の国、浄土ではビオスがゾエー(ゾエーいのち)に転換する¹³⁸。ゾエーは肉体の中に吹き込まれた神の息により、生きとし生けるもののいのちであると考える。「依正不二」[依報(自然)と正報(人間主体)とは不二、即ち一体であるということ]の自然觀こそ必要であると考える。気候変動、動植物の絶滅、技術至上主義を「一」立ち止まって、自己への省察をしたい。マルチン・ルーサー・キング[1929-1968]牧師は、I have a dreamと言った。もはやヘイトがない「義」、欠陥、短所も見出されない「平和」、アラー、仏陀、キリストが共生し、臨在(パルーシア)の「喜び」の満ちた世界である。

(出3・7)に記載ありません。それは、神の言葉イエス・キリストを通じて示された小さくされた者の側に立つ神と同じ神です。したがって『神に仕える者』は、この神が立っておられるところに自分も立つように心掛け、同じ視点を持って、苦しむ人々の痛みを共感するところから全てを判断し、行動を起こす人のはずです、と。

¹³³『自然の問題と聖典一人間の自然とのよりよい関係を求めて』(編集者樋口進 平林孝裕 キリスト新聞社 2013年 134,153-156 頁)。

¹³⁴ "A Greek-English Lexicon" Henry George Liddell & Robert Scott, Oxford at the Clarendon Press, 1968 p.1675.

¹³⁵ "Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged" Philip Babcock Gove Merriam-Webster Inc. USA 1993 p.2316.

¹³⁶『キリスト教と社会学の間』(村田充八 晃洋書房 2017年 240-243 頁)。

¹³⁷『ユダヤ教・キリスト教・イスラームは共存できるか——神教世界の現在』(小原克博 同志社大学一神教学際研究センター 2009年 322 頁)。

¹³⁸ビオスは、「寿」(生命)、ゾエーは「無量寿」(量りしえない、のち)と考えたらどうだろうか。『中村大辞典』下巻(1649 頁)、同中巻(754 頁)。